

## 徳島県におけるナシ黒星病菌のベンゾイミダゾール剤およびDMI剤に対する感受性

辻 雅人

（徳島県立農林水産総合技術センター果樹研究所）

ナシ黒星病防除のために使用されている殺菌剤のうち、現場で防除効果の低下が指摘されているベンゾイミダゾール剤と黒星病菌の耐性化が懸念されているDMI剤について、2000年と2001年に黒星病菌の感受性を調査した。

徳島県内のナシ圃場5カ所から、6月に黒星病罹病葉を圃場全体から採集し、1葉から1菌株を単孢子分離して、1圃場当たり30～39菌株を試験に供した。感受性検定にはチオファネートメチル水和剤とフェナリモル水和剤を用い、薬剤を添加したPDA培地上での菌糸生育からチオファネートメチルについてはMICを、フェナリモルについてはEC<sub>50</sub>を求めた。

チオファネートメチルのMICは、供試した173菌株いずれも1μg/ml以上で、全て耐性菌と判断された。耐性の程度も高く、50%以上の菌株が

MIC100μg/ml以上の強耐性菌であった。フェナリモルに対しては、5圃場とも全体的に感受性が低下している傾向がみられた。5圃場のEC<sub>50</sub>は、最低値が0.001～0.333μg/ml、最高値が1.946～2.478μg/ml、平均値が0.633～0.844μg/mlと、最低値を除いてはよく似た値を示した。耐性菌と判断されるEC<sub>50</sub>1μg/ml以上の菌株率は、16.7～35.5%と圃場間でやや差がみられたが、いずれも比較的高く、平均すると27%であった。

ベンゾイミダゾール剤については、防除効果の低下が耐性菌によるものであることが明らかとなったため、使用を中止し、DMI剤については、耐性化の発達を防止するため、使用回数を制限すると共に開花期前後に集中している使用を分散させる必要があると考えられた。

## 刈取機の刈刃加熱によるシソ青枯病の二次伝染抑制効果

篠崎 毅・重松康之・村上要三

(愛媛県農業試験場)

赤しそは地域特産物として愛媛県東予地域で栽培されているが、平成4年頃からシソ青枯病が発生し、現在では安定生産・面積拡大の最大の阻害要因となっている。

シソ青枯病は土壌伝染性病害であるが、赤シソ栽培では、刈取機で赤シソ先端部を収穫する作業が約1週間間隔で繰り返し行われ、この作業で発病株の青枯病菌が刈刃を通して隣接株に二次伝染し急速に発病株が増加する特徴をもつ。

このため、刈取機の刈刃加熱による二次伝染抑制効果について検討した。

まず最初に、各温度(40~90℃)に設定したウオーターバスに青枯病菌懸濁液を入れ、菌密度の変化により殺菌効果を検討した結果、90℃では菌の検出はされず殺菌効果は高かった。

また、刈刃としてカッターを使用し、カッター

を各温度(60~100℃)まで加熱し、その温度時に発病株を切断し次に健全株を切断することで、瞬時の殺菌効果を検討した結果、90℃以上で二次伝染による発病は見られず殺菌効果は高かった。

次に、シソ刈取機での刈刃加熱による二次伝染抑制効果を検討した。刈刃への加熱は、刈刃基部の表面にステンレス箱を置き、その中で炭火をおこす方法で行った。その結果、刈刃の温度は65~110℃程度得られた。刈取りは約2週間間隔で5回行ったが、最終調査では、無処理区では発病株率が約81%であったのに対し、加熱処理区では約13%と低く、二次伝染抑制効果は高かった。

なお、刈刃加熱による収穫物への影響や刈取後のシソへの影響等については、刈取機の改良と併せて今後さらに検討が必要である。

## 生物農薬の温風器ダクト内処理における促成栽培ナスハウスでの飛散について

高橋尚之

(高知県農業技術センター)

施設栽培のナス灰色かび病に対して、生物農薬であるバチルスズブチルス水和剤（ポトキラー水和剤）を温風器ダクト内処理することにより高い防除効果が得られることを演者らが報告した（平成13年度日本植物病理学会関西支部会）。そこで、効果的なダクト内処理方法を検討するため、促成栽培ナスハウス内でのバチルス菌の飛散状況を調査した。

ビニルハウス（南北棟 7.5×26.6×3.7m、約200㎡）は、ビニルフィルム（厚さ0.075mm）で被覆し、内張りには同（厚さ0.05mm）を供試した。温風器はHK-1520（ネボン株式会社製）を北西部に設置し、ダクトはポリエチレンフィルムで直径32cmのものを用いた。なお、ダクトには直径約8cmの穴を約80cm間隔で直線上に上向きにあげ、畦の周囲を口の字状に取り囲むように配置した。夜間最低管理温度は13℃に設定した。ナス（品種：竜馬、台木：ヒラナス）は、2001年9月20日に2条千鳥植え（畦幅180cm、株間60cm）で定植し、垣根仕立てとした。ポトキラー水和剤は、1回当たり網袋に30gずつ入れ、温風器の2カ所

の送風口に吊し、2001年11月7日、11月28日、12月21日、2002年1月11日、2月1日、2月22日、3月16日にダクト内処理を行った。バチルス菌の飛散状況は、直径9cmもしくは5.2cmのNutrient Agar (NA) 平板をハウス内に暴露して捕捉し、暗黒下25℃で4日間以上培養後に形成されたコロニー数を計数することにより確認した。

2002年2月9～10日に、畦の上5カ所にNA平板を3時間間隔で暴露したところ、夜間の温風器稼働に伴いバチルス菌の捕捉数は増加したが、日中でも捕捉された。また、2月13日および23日に畦の上20カ所にNA平板を配置し、16時間暴露したところ、1㎤当たり9.5～21および35～50個のコロニーの形成が認められた。さらに、2月15日に畦の上から上方へ30、60、90、120cm位置にNA平板を固定し、ハウス内5カ所に16時間暴露したところ、1㎤当たり24～35個のコロニーの形成が認められた。いずれも場所による差は少なかった。

以上、ダクト内処理によりバチルス菌はハウス内にほぼ均一に飛散することが確認された。

## ハグマノキサビ病（新称）の発生

奈尾雅浩

（愛媛防除所）

2001年5月、愛媛県内の切花栽培のハグマノキ（スモークツリー）において、国内で未確認のさび病が発生した。発生は1圃場だけであり、発病株は1994年から栽植されているが、過去に本病害は確認されていない。標徴は葉や花梗の一部が肥大して奇形となり切花の商品価値を低下させた。奇形部位には、さび胞子が観察され、さび胞子堆の被害とみられた。6月の剪定後に萌芽した茎葉には症状がなくなり、7月上旬から葉に夏胞子堆とみられる直径約0.5mmの暗褐色の小点を多数生じた。梅雨明け後、標徴は一時消失した。その後、9月下旬に再び夏胞子堆を、10月下旬には、こげ茶色の冬胞子堆を生じた。今回観察されたさび胞子は卵形又は洋梨形で、表面に微細な針状構造を持ち、淡褐色で大きさ17.3-27.2（平均値：22.5）×27.2-51.0（34.3） $\mu\text{m}$ 、発芽孔は4個以下で赤道部にみられた。細胞壁の厚さは1.7-3.7（3.1） $\mu\text{m}$ であった。夏胞子は球形で、表面に微

細な針状構造を持ち、淡褐色で大きさ24.0-33.6（27.9） $\mu\text{m}$ 、発芽孔は4-5個が全体に散在し、細胞壁の厚さは2.0-3.4（2.5） $\mu\text{m}$ であった。透明の柄を単独で有し、大きさ7.0-12.0（8.8）×18.0-90.0（41.6） $\mu\text{m}$ 、夏胞子との接続部は8.0-16.0（11.1） $\mu\text{m}$ 幅であった。冬胞子は扁球形、表面は平滑、暗茶色で大きさ27.0-32.0（30.1）×12.0-26.0（19.4） $\mu\text{m}$ 、単独の頂孔を持ち、細胞壁の厚さは4.0-6.4（4.7） $\mu\text{m}$ であった。透明で永続性の柄があり、大きさ5.0-8.0（6.6）×60.0-116.0（87.7） $\mu\text{m}$ 、基部は粗造となっていた。Thompson（1960）により報告されたハグマノキサビ病菌の *Pileolaria cotini-coggygriae* Tai & Cheo とは、各器官の形態的特徴は殆ど一致したが、大きさに異なる点があるため、種名はさらに精査して決定する。従って、今回は *Pileolaria* sp. によるハグマノキサビ病（新称）と呼称したい。

ピーマンにおける *Stemphylium lycopersici* による黒かび病および  
*Fusarium lateritium*による実腐病（病原追加）

富岡啓介・佐藤豊三<sup>1)</sup>・藤野雅文

（近畿中国四国農業研究センター・<sup>1)</sup> 農業生物資源研究所）

1999年8月および2001年5月、香川県で収穫されたピーマン果実に腐敗性病害を認めた。1999年の病害は果皮に現れた小褐点が拡大して果実全体が腐敗に至る。病斑には褐色の分生子柄と分生子が暗褐色ピロード状に生じた。分生子柄は単生、無分枝、細疣状粗面、1～5隔壁、長さ40～140 μm、幅4～8 μm、先端で幅6～10 μmとやや膨らんで貫生。分生子は分生子柄先端に全出芽で単生、細疣状粗面、石垣状多細胞、先端が丸いかやや尖る俵形で明瞭な1～3（～4）横隔壁で縊れ、大きさ54～60×16～21 μm、1/b比2.7～3.4（平均3.1）。以上より本菌を *Stemphylium lycopersici* (Enjoji) Yamamotoと同定した。2001年の病害は果実のへた周辺に現れた水浸状不整形病斑が拡大して果実全体が腐敗に至る。病斑から気中菌糸に富む黄褐色のPDA菌叢となる糸状菌が分離された。SNA, 25° C, 暗黒下で

生じた本菌の分生子柄は長さ16～52 μm、1～4隔壁。分生子は分生子柄先端のモノフィアライドから生じ、脚胞のある鎌形、3～5隔壁、大きさ16～34×2～3 μm。以上より本菌を *Fusarium lateritium* Nees と同定した。分離した *S. lycopersici* と *F. lateritium* の分生子懸濁液を健全なピーマン果実に滴下ないしは内部に注入した結果、いずれも原病徴が再現され、接種菌が再分離された。*S. lycopersici* による白斑病（斉藤ら, 1968, 1970）は果実での発病記録がない。今回の *S. lycopersici* による病害は *S. botryosum* による黒かび病（村田, 1916）の症状に似ていることから、*S. lycopersici* を本病の病原として追加したい。また、*F. lateritium* による病害は *Fusarium* sp. による実腐病（西原, 1967）の症状に似ていることから、*F. lateritium* を本病の病原として追加したい。

## ナミテントウ (*Harmonia axyridis*) の休眠と利用

高橋知代・大林延夫

(愛媛大学農学部環境昆虫学研究室)

ナミテントウは日本各地に普通で、アブラムシ類の重要な天敵である。成虫休眠を利用して、長期間保存できれば、生物農薬としての利用価値は増大する。

ナミテントウの幼虫を2齢から短日(12L 12D)および長日条件(15L 9D)で個体飼育し、羽化10日目に解剖して卵巣の発達程度と脂肪の蓄積程度を調べた。また、同じ条件で飼育した成虫を5℃全暗条件で保存し、生存率を調べた。

その結果、長日条件では卵巣がよく発達したが、短日条件では脂肪が多く蓄積して卵巣は発達しなかった。また、冷蔵保存したナミテントウは、短日条件で生育したものの生存日数が220日を越え、最も長くなった。

休眠のために野外で集合したナミテントウ成虫を5℃全暗条件で保存し、1ヶ月おきに雌雄それぞれ10頭ずつ取り出して、15L 9D 24℃の長日

条件下でソラマメヒゲナガアブラムシを与えてペアごとに飼育し、産卵までに要する日数を記録した。

その結果、全く冷蔵しなかったものは約1ヶ月後から産卵を開始した。冷蔵したものは、冷蔵期間が長くなるほど産卵開始の時期が早くなり、4～5ヶ月間冷蔵したものは、約1週間後から産卵を開始した。

これらの結果から、ナミテントウは短日条件で休眠が誘起され、幼虫期から羽化後10日目頃まで短日条件で飼育すると休眠成虫が効率よく得られることが明らかとなった。また、休眠成虫は、冷蔵庫などで長期保存が可能で、これを取り出して長日条件下に置けば1～2週間後には産卵を開始する。このことから、ナミテントウ成虫を長期間保存し、必要な時期に取り出して生物防除に利用する技術が確立された。

## 周辺環境がミカンキイロアザミウマの発生とハウスミカンの被害におよぼす影響

毛利信治・松木保雄<sup>1)</sup>

(香川県農業試験場病害虫防除所, <sup>1)</sup>香川県農業生産流通課)

香川県では、平成9年よりミカンキイロアザミウマによるハウスミカンの被害が発生し、食害痕や食害された果実の流通過程での変色腐敗による果実品質の低下が大きな問題となっている。しかし、ミカンキイロアザミウマの発生生態が十分に解明されていなかったため、発消長にあわせた効果的な防除法が確立されていなかった。そこで、ハウスミカン園周辺でのミカンキイロアザミウマの発消長およびハウスミカンの被害発生程度について調査を行った。

調査場所は高松市鬼無地区と下笠居地区の2地区を選定し、雑草地、露地ミカン園の有無により各地区4地点を設定した。そして、雑草地では、雑草の生育と草種別寄生状況およびミカンキイロアザミウマのトラップ誘引数を調査した。露地ミカン園では、花での寄生状況とトラップ誘引数を調

査した。ハウスミカン園では、ハウス内とハウス隣接地のトラップ誘引数、果実へのミカンキイロアザミウマの寄生数および被害果率を調査した。

その結果、①ミカンキイロアザミウマの主な発生源は雑草地であり、草種によりミカンキイロアザミウマの生息場所、増殖場所としての適性が異なること、②野外でのミカンキイロアザミウマの発生量・発生ピークと雑草生育状況には関係が認められること、③ハウス周辺に雑草地と露地ミカン園が隣接している地点ではトラップの総誘引数が非常に多いことがわかった。

これらのことから、ミカンキイロアザミウマの寄生密度の高い雑草（クサフジ類）の生育状況と花での寄生状況を把握することにより、野外でのミカンキイロアザミウマの発生予察が可能であると推察された。

## スダチの果面食害虫の被害と簡易スプリンクラーによる防除

中西友章・貞野光弘<sup>1)</sup>・河野由希

(徳島県果樹研究所・<sup>1)</sup> 現徳島県立農林水産総合技術センター研究企画室)

スダチの病害虫ではシャクガ類、ハマキムシ類、カネタタキ、ミノムシ類などの果面を咀嚼する害虫（以下果面食害虫）の被害が温州ミカンなどに比べ多く、重視されている。

これら果面食害虫による被害症状は似ているうえ、加害虫は夜行性や擬態、葉と葉の間隙での潜伏等の習性のから発見が難しい。また、被害部分はしばらく日数が経過して白色（癒傷組織の形成）にならないと発見され難い。これらの点が防除を難しくする要因となっている。

そこで、有効かつ省力的な防除体系の確立を目的に、被害の実態調査および各種の防除試験を行った。果面食害虫による被害果の発生について2000年～2002年の3年間（収穫前の約2ヶ月間）、佐那河内村の露地スダチ園で薬剤手散布区と簡易スプリンクラー区を設置し、調査した。両区とも被害果は6月下旬頃から見られ初め、収穫初めの

8月下旬まで発生するが、特に7月上旬～下旬に多い傾向にあった。このことから、防除時期は7月上旬を基幹防除とし、さらに発生状況に応じて補完防除を6月下旬もしくは7月下旬にするのが良いと思われた。また、収穫した果実の被害率は簡易スプリンクラー区と手散布区で大きな差はなかった。

1999年～2001年に各種薬剤試験（主に室内試験）を行ったところ、DDVP乳剤、フェンプロパトリン乳剤、クロルフェナピルフロアブルなどが、これら果面食害虫に効果が高かった。

2000年に、これらを踏まえた薬剤防除体系（7月上旬クロルフェナピルフロアブル、7月下旬DDVP乳剤）で行ったところ、収穫した果実の被害率は過去3カ年（7月上旬DDVP乳剤）の約半分に当たる手散布区1.5%、簡易スプリンクラー区1.7%に軽減できた。



## 防虫ネットを利用した露地栽培コマツナにおける害虫相と防除上の一考察

田中昭人・中野昭雄

(徳島県立農業水産総合技術センター農業研究所)

徳島県の吉野川下流域で栽培が盛んな露地栽培コマツナでは、キスジノミハムシ、アザミウマ類の食害による被害が大きい。しかしながら登録農薬も少なく生産現場では防虫ネット（1mm目合い）と薬剤防除を組み合わせた栽培が行われているが、依然被害は大きい。そこで目合い（0.6mm, 0.8mm, 1mm）の異なる防虫ネットを用いて時期別の害虫の発生状況調査を行い効果的な防除について考えた。

調査期間中において発生した害虫はキスジノミハムシ、アブラムシ類、アザミウマ類、モンシロチョウ、コナガ、ハダニ類、カブラハバチ、ハモグリバエ類、ハイマダラノメイガ、ハスモンヨトウの計10種であった。中でもキスジノミハムシ、アブラムシ類、アザミウマ類は3種類の目合いの

防虫ネットを被覆した区においても発生が見られた。キスジノミハムシ、アブラムシ類では、防虫ネットの目合いが小さくなるほどその被害程度、寄生虫数が少なくなる傾向が見られたが、アザミウマ類ではいずれの区においても発生が見られた。また、時期別の発生量を比較すると、キスジノミハムシでの被害は6, 7, 8月作付け期に多く、アザミウマ類では5, 6月に多かった。しかし、アブラムシ類では時期による発生量の変動はあったものの試験期間を通じて発生が見られた。

これら害虫の発生状況から、薬剤防除を行う場合5, 6月作付け期においてはアザミウマ類を、6, 7, 8月作付け期においてはキスジノミハムシを対象とした薬剤を選定することで被害が軽減できるものと考えられる。

## 新規殺虫剤トルフェンピラド(ハチハチ®)乳剤を用いたアブラナ科害虫の体系防除

○和氣坂成一・笹間康弘(大塚化学鳴門研究所)・  
高城圭子(日本農薬 開発部)

トルフェンピラド(試験番号: OMI-88)乳剤は平成14年4月に新規登録された殺虫剤である。本剤はアブラナ科のコナガ、アブラムシ類だけでなく果菜類の重要害虫アザミウマ類、コナジラミ類、ハモグリバエ類、ホコリダニ類、サビダニ類などにも優れた効果を示すことが明らかとなっている。ここでは、本剤を用いたキャベツの体系防除について検討を行った。まず、ハスモンヨトウに対する防除効果をキャベツ圃場で検討した。その結果、若齢幼虫が主体の場合、本剤は初期密度の10分の1まで密度を抑制した。次に、体系防除における使用時期を検討するために、群馬県嬭恋

村の慣行防除とそれに本剤を組み入れた防除体系の比較を行った。トルフェンピラド乳剤と7種の散布剤(エマメクチン安息香酸塩乳剤、BT剤3剤、スピノサド顆粒水和剤、クロルフェナピルフロアブル、イミダクロプリドフロアブル)との組み合わせで3区を設定し、定植21日後から約7日間隔で所定の薬剤を散布した。その結果、体系前半のイミダクロプリドフロアブルとBT剤との代わりにトルフェンピラド乳剤を組み入れるとコナガだけでなくアブラムシ、ウワバも同時防除が可能となり、省力化が実現できた。

## ピーマンのマメハモグリバエに対する抵抗性に関する研究

○柏木文弘・堀端 陽・Daniel, B. M.・手林慎一・金 哲史・堀池道郎  
(高知大・農)

北アメリカ原産のマメハモグリバエ (*Liriomyza trifolii*) は、その適応能力の高さと広い寄主範囲を有することから施設園芸において防除の難しい重要害虫として知られている。本研究では、圃場においてナス科のピーマン (*Capsicum annuum*) に対する本種の被害が著しく少ない点に着目し、その要因を生物的・化学的に明らかにすることを目的とした。

様々な生育段階のピーマンを一鉢ずつ単独でケージに入れ、本種に産卵させた。24時間後葉上に残された産卵痕数を計測したところ、ピーマンの成長に従って単位面積あたりの産卵痕数が減少し抵抗性が増大することを見出した。また10葉期のピーマンの部位ごとの抵抗性を調べたところ、下位葉では単位面積あたりの産卵痕数がインゲンマメと同程度かそれ以上認められたが、上位葉では十分の一以下の産卵痕数しか認められず、若い

葉の抵抗性が古い葉のそれと比べ著しく強いことが明らかとなった。つぎにピーマン生葉（結実期）の90% MeOH抽出物の溶液をインゲンマメ初生葉に塗布し本種に与えたところ、本種の産卵を完全に抑制したことからこの抵抗性が化学物質の存在に基づくことが明らかとなった。このMeOH抽出物を各種分画方法を用いて活性成分を追求した結果、結晶性の活性化合物を得た。この化合物を各種機器分析に供したところ、希少なフラボノイド配糖体のLuteolin-7-O-apiosyl-(1→2)-glucosideであることが明らかとなった。活性化合物は極めて低濃度(14.3 μg/cm<sup>2</sup>)で本種の産卵を完全に抑制した。本化合物はピーマン葉1g中に0.86mg (122.9mg/cm<sup>2</sup>)という高濃度で含まれており単離も容易であることから、今後生物由来の農薬としての利用が期待される。

## ジャスモン酸によって誘導されるマメハモグリバエに対するピーマンの抵抗性因子

○三輪えりこ・柏木丈弘・堀端 陽・手林慎一・金 哲史・堀池道郎

(高知大農・生資)

マメハモグリバエ(*Liriomyza trifolii* Burgess) はマメ科、ナス科をはじめ、広範囲の農作物を加害し、農薬に対する抵抗性も極めて高い難防除害虫である。ナス科のナス(*Solanum melongena*) は本種の加害を受けるものの、同じナス科のピーマン(*Capsicum annuum* var. *angulosum*) は加害を受けにくく、その加害も下位葉に集中し上位葉はほとんど加害されないことを見出した。一方、近年ジャスモン酸、キトオリゴ糖類、重金属などエリシターと呼ばれる化学物質を植物に処理することで抵抗性を発現させる試みがなされているが、その対象となっているのは主に病害であり害虫に対する抵抗性誘導に関する研究は極めて少ない。そこで、マメハモグリバエに対して感受性であるピーマン下位葉にエリシターとしてジャスモン酸を処理し、本種に与えたところ、産卵行動

が有意に阻害された。すなわち、感受性であるピーマン子葉へのジャスモン酸処理は本種に対する抵抗性を誘導することが明らかとなった。また、処理葉の二次代謝産物と無処理の子葉の二次代謝産物をHPLCにより分析を行い比較したところ、顕著に増大しているピークが認められた。この化合物を抵抗性因子と考え精製を試みた。複数の逆相クロマトグラフィーにより目的化合物を単離し、構造解析を行ったところ(*E*)-Caffeoylputrescineであると同定した。合成した(*E*)-Caffeoylputrescineを感受性であるインゲンマメの初生葉に塗布し、マメハモグリバエに与えたところ、産卵行動が阻害された。従って、(*E*)-Caffeoylputrescineはジャスモン酸によって誘導されるピーマンのマメハモグリバエに対する抵抗性因子であると結論した。

# 平成13年度の病害虫発生の特徴とその対策並びに防除上の問題点

## 徳 島 県

(農林水産部農業経営課 前田 弘之)

### 1. 水 稲

#### (1) いもち病

早期栽培での葉いもちの初発生は、平年(6月3日)より早い5月28日に確認された。その後、発生面積は漸増し、ほぼ平年並みとなったが、発生程度は低いままで経過し、全体的に平年と比べてやや少なめの発生であった。

穂いもちの発生は、葉いもち病の発生が少なかつたことに加え高温小雨の気象条件が続いたため、7月下旬に発生を確認したものの、発生面積、発病穂率ともに平年を下回った。その後、発生面積は増加したものの発病穂率は変わらず、平年より少なめの発生となった。

普通期栽培での葉いもちの初発生は、平年(6月8日)より早い5月30日に確認され、発生面積、発病度ともに平年並みであった。その後も全期間を通して平年並からやや少なめの発生で経過した。

穂いもちの発生は8月上旬に発生を確認したものの、葉いもち病の発生が少なかつたことに加え、高温小雨の気象条件が続いたため、8月上旬に発生を確認したものの、発生面積、発病穂率ともに平年を下回り、全般的に平年と比べて少なめの発生であった。

#### (2) 紋枯病

早期栽培では、平年並みの6月下旬に発生が確認された。発生面積は平年並みであったが、発病株率がやや高かつた。その後、気象の上昇に伴い発生が増加し、発生面積、発病度ともにやや高めとなった。

普通期栽培では、7月上旬に発生が確認され、発生面積、発生株率ともに平年並であった。その後は発生が増加して、平年と比べてやや多めの発生となった。注意報を発令した昨年と比べても、上位葉での発病が目立った。防除は混合剤によりウンカ類との同時防除が行われた。

#### (3) セジロウンカ

平年(5月31日)よりやや遅い6月3日に初飛来が認められ、飛来量は平年並からやや多めであった。早期栽培における6月6半旬の巡回調査

では、発生圃場率が平年と比べて高かつた。その後も収穫に至るまで概ね多めの発生で推移した。普通期栽培における6月6半旬の巡回調査では、発生圃場率が平年と比べて多かつた。その後も概ね多めの発生のまま推移した。防除は混合剤により、紋枯病との同時防除が行われた。

#### (4) トビイロウンカ

予察灯への飛来は、8月21日に雌1頭が確認されたのみであった。

7月3半旬の巡回調査において、圃場での生息が認められ、7月6半旬には、短し型雌成虫の生息が確認された。これらは、平年と比べてかなり早い時期での発生であり、多発が懸念されたものの、収穫まで急激な増加は見られず、虫数は少なめであった。

防除は混合剤による紋枯病との同時防除及び粉剤、液剤による本田防除が行われた。一部では苗箱処理剤の施用が行われた。

#### (5) 斑点米カメムシ類

早期栽培における6月下旬から7月上旬にかけての周辺雑草地調査では、生息密度が高かつたものの、本田への侵入は少なかつた。

普通期栽培における7月上旬に行なった周辺雑草地調査では生息密度が高く、一部で本田への進入が確認されたため、7月18日付けで注意報を発令した。8月3半旬の巡回調査では、発生面積、虫数ともに平年よりやや多めであったが、以後は減少した。全般的には平年と比べてやや多めの発生であった。

#### (6) イネクロカメムシ

早期栽培では、平年並みの7月上旬から発生がみられた。その後は発生がやや増加し、発生面積、発生虫数とも平年よりやや多めとなった。

普通期栽培では、発生量は7月上旬からやや多く、以降も平年よりやや多めの発生のまま推移した。

#### (7) コブノメイガ

早期栽培では、平年並みの7月中旬以降に被害が認められ、発生面積は多かつた。

普通期栽培では、平年並みの7月中旬以降に被害が認められたものの、発生面積、被害株率ともに平年よりやや少なめの発生であった。その後、漸増し、発生面積、被害株率ともに平年並みとなった。

#### (8) イネミズゾウムシ

予察灯への発飛来は平年よりやや早い4月11日に認められ、誘殺虫数は平年並みであった。普通期栽培における本田への進入は平年並みの4月6半旬に認められ、発生面積はやや多かったものの、本田生息虫数は平年並みであった。早期栽培での本田への進入は平年並みの5月6半旬に認められ、発生面積、本田生息虫数共に平年並みであった。

## 2. 果 樹

### 1) 果樹共通

#### (1) カメムシ類

冬季に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査において、越冬密度は少なかった。

予察灯、集合フェロモントラップともに春先から誘殺数が少ないまま経過した。

予察灯への誘殺数は8月中旬以降増加したものの、平年と比べて少なかった。

### 2) カンキツ

#### (1) そうか病

春葉、果実ともに初発生時期は平年並であった。発生面積はやや多かったものの、発病度は平年より低かった。その後も発病度は低いままで経過した。越冬病斑量が少なめであり、高温少雨の気象条件が続き、発病が抑制され、全般的には平年並み～やや少なめの発生となったと考えられる。発芽直後と落弁期の2回、薬剤による防除が行われた。

#### (2) 黒点病

発生面積は多かったものの、果実発病度は低かった。

高温小雨の気象条件が続き、発病が抑制されたため、全般的には平年と比べてやや少なめの発生となったと考えられる。

#### (3) かいよう病

初発生時期は平年並であったが、発生量は平年と比べて少なかった。その後、発生面積はやや多くなった(特にスダチ)ものの、果実発病度は平

年より低めで経過した。展葉期と幼果期に薬剤防除が行われた。

#### (4) ミカンハダニ

春先から発生がみられ、平年並みからやや少なめの発生で推移していたが、増殖に好適な高温小雨の気象条件が続き、9月中旬頃から発生が増加し平年よりやや多めの発生となった。

### 3) ナ シ

#### (1) 黒星病

4月中旬に葉、5月中旬に果実での発病を確認したが、その後はほとんど発生が見られなかった。全般的に、平年よりやや少なめの発生であった。

#### (2) 輪紋病

越冬いぼ数が少なかったことに加え、感染期である梅雨期に降雨が少なかったため、全般的に少発生で推移した。

#### (3) うどんこ病

8月中旬以降発生がみられ始めた。発生面積はほぼ平年並みであったが、発生量は平年を大きく下回った。全般的には平年より少なめの発生であった。

#### (4) ナシヒメシクイ

一部の圃場で被害がみられたが、全般には平年より少なめの発生であった。

#### (5) ハダニ類

7月中旬に発生が認められたが、発生量は少なかった。その後も少発生のまま推移し、全般に平年より少ない発生であった。

#### (6) アブラムシ類

5月上旬頃から新梢への発生がみられ始めた。6月上旬頃に一部で激発圃場も見受けられたが、概ね平年並みからやや少なめの発生で経過した。

### 4) カ キ

#### (1) 落葉病類

角斑落葉病は平年よりやや早い7月中旬から発生が認められた。当初はやや少なめの発生であったが9月以降増加し、ほぼ平年並みの発生となった。

、円星落葉病は平年よりやや早い9月下旬から発生がみられたが、全般に平年より少なめの発生となった。

## 3. 野 菜

### 1) 野菜共通

(1) ハスモンヨトウ

フェロモントラップへの誘殺虫数は、概ね平年並みからやや多で推移した。

圃場では、7月中旬頃から夏秋ナス、レンコンなどで被害が見られた。10月にはレタスやアブラナ科野菜に寄生が認められたが、発生量は平年並みである。

2) 冬春トマト

(1) 灰色かび病

12月下旬頃から発生が認められたが、発生量は少なかった。1～2月にかけては、一部に多発圃場も認められたものの、それほど増加せず、全般には平年よりやや少なめの発生となった。

3) 冬春ナス

(1) うどんこ病

10月下旬頃から発生が認められ、発生量は平年並みであった。その後の発生量は少なめであった。その後の発生量は減少し、1月以降はほとんど発生が見られなくなった。

(2) すずかび病

平年より遅い12月下旬頃から発生が見られ始めた。当初の発生量は少なめであったが、1月下旬以降は増加し、平年よりやや多めの発生となった。

(3) 灰色かび病

4月下旬まではほとんど発生が認められなかった。

4) 夏秋ナス

(1) うどんこ病

平年よりやや早い6月下旬頃から発生が見られ、発生面積、発病葉率はやや高かった。7月下旬～8月にかけての発生はやや少なくなったものの、概ね平年並みからやや多の発生で推移した。

(2) 褐色腐敗病

7月中旬頃から発生が認められた。8月下旬には発生がやや多かったが、概ね平年並みの発生で推移した。

(3) 青枯病

7月下旬以降から発生が見られはじめた。一部で激発圃場も見受けられたが、概ね平年並みの発生で推移した。

5) 冬春キュウリ

(1) べと病

平年より早い12月中旬頃から広範に発生が認められた。発生量はほぼ全期間を通じて平年並みからやや多で推移した。

(2) 灰色かび病

1月下旬にごく一部の圃場で発生が見られた程度であった。

6) 秋冬ネギ

(1) シロイチモジヨトウ

当初から発生が認められており、平年よりやや多めの発生のままで推移した。

7) 冬春ホウレンソウ

(1) べと病

栽培品種の変遷に伴いこの数年間殆ど見受けられなかったが、1月中旬から3月頃にかけて広範に発生が認められた。

8) 冬春イチゴ

(1) うどんこ病

育苗中から発生が認められたが、発生量は少なかった。本圃では10月下旬頃から発生が見られはじめ、11月から12月に一部に多発圃場も見受けられた。しかし、全般にはやや少なめの発生のまま推移した。

(2) 灰色かび病

ほとんど発生が認められなかった。

(3) アブラムシ類

定植直後の9月下旬から寄生が認められた。10月下旬から11月にかけてやや増加し、一部では激発圃場も見受けられたが、それ以降は減少し、全般に平年並みからやや多めの発生で推移した。

(4) ハダニ類

定植直後の9月下旬からほぼ全期間を通じて発生が認められた。

発生量は平年並みからやや多めで推移したが、2月以降は激発圃場も散見された。

9) ハス

(1) 褐斑病

8月中旬頃から発病度は低いものの広範に発生がみられた。発生量は激発した前々年、多発した前年より少なかったものの、平年に比べてやや多めの発生であった。

平成13年度 主要病害虫発生状況 (徳島県)

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
<b>早期イネ (8,300)</b>			黒星病	41	少
苗立枯病	5	少	赤星病	29	少
苗いもち	10	少	うどんこ病	219	やや多
葉いもち	3,537	やや少	輪紋病	3	並
穂いもち	2,174	少	カメムシ類	0	
紋枯病	5,714	やや多	ナシヒメシンクイ	20	少
ニカメイガ	0	少	ハダニ類	20	少
セジロウンカ	7,619	多	アブラムシ類	208	やや少
トビイロウンカ	136	少	<b>モモ (71)</b>		
ツマグロヨコバイ	6,398	やや多	コスカシバ	14	並
イネクロカメムシ	1,766	やや多	<b>カキ (391)</b>		
斑点米カメムシ	952	やや少	炭そ病	78	並~やや少
コブノメイガ	4,217	並	うどんこ病	195	並~やや少
イネミズゾウムシ	5,034	並	落葉病類	234	並
<b>普通イネ (5,800)</b>			カメムシ類	39	
苗立枯病	5	少	<b>冬春トマト (68)</b>		
苗いもち	5	少	疫病	6	並~やや多
葉いもち	3,096	やや少	灰色かび病	20	やや少
穂いもち	2,304	少	オンシツコナジラミ	34	やや多
紋枯病	4,129	やや多	<b>夏秋ナス (198)</b>		
ニカメイガ	158	少	うどんこ病	178	並~やや多
セジロウンカ	5,162	多	褐色腐敗病	59	並
トビイロウンカ	158	並	青枯病	19	並
ツマグロヨコバイ	4,925	並	<b>冬春ナス (39)</b>		
イネクロカメムシ	1,429	やや多	灰色かび病	7	少
斑点米カメムシ	1,508	やや多	すすかび病	35	やや多
コブノメイガ	3,335	並	ミナミキイロアザミウマ	23	並~やや多
イネミズゾウムシ	1,351	並~やや少	<b>冬春キュウリ (61)</b>		
<b>ムギ (200)</b>			べと病	60	並~やや多
さび病類	10	少	灰色かび病	6	少
うどんこ病	44	少	ミナミキイロアザミウマ	36	やや多
赤かび病	40	並	<b>夏ネギ (45)</b>		
<b>サツマイモ (1,310)</b>			さび病	4	並
立枯病	60	少	ネギアザミウマ	2	並
ナカジオシタバ	460		<b>秋冬 (110)</b>		
ハスモンヨトウ	325	並~やや多	シロイチモジヨトウ	66	やや多
ハダニ類	589	少	<b>冬春ホウレンソウ (983)</b>		
<b>カンキツ (2,343)</b>			べと病	236	並~やや多
そうか病	1,150	並	アブラムシ類	432	やや少
黒点病	1,660	やや少	<b>冬春イチゴ (113)</b>		
かいよう病	1,100	やや少	うどんこ病	31	やや少
ヤノネカイガラムシ	40	少	アブラムシ類	54	並~やや多
ミカンハダニ	1,641	やや多	ハダニ類	22	やや多
ミカンサビダニ	424	やや少	<b>ハス (665)</b>		
カメムシ類	5		褐斑病	437	並~やや多
<b>ナシ (292)</b>			ハスモンヨトウ	650	多



# 香 川 県

(農林水産部農業経営課 牛田 泰裕)

## 1. 水 稻

### (1) いもち病

前年の発生量が少なかったため、早期栽培、普通期栽培ともに苗いもちの発生は認められなかった。

早期栽培では7月上旬から葉いもちの発生を認め、やや遅い初発生であった。以降、発生圃場率、発病株率ともやや低く経過し、穂いもちの発生量も少なかった。

普通期栽培での葉いもちの初発生は7月下旬でやや遅く、その後、やや少ない発生量で推移した。穂いもちの発生量は平年並であった。

### (2) 紋枯病

早期栽培では6月下旬から発生を認め、平年並の初発生であった。初期の発生量はやや少なかったが、収穫期に入って平年並となった。

普通期栽培では初発生時期、その後の発生経過とも平年並であった。

### (3) セジロウンカ

6月第2半旬に飛来波があり平年に比べやや早かった。その後、広範囲に寄生を認め、多発傾向にあったが、7月に入って平年並の発生量となった。

### (4) トビイロウンカ

早期栽培では初発生時期、発生圃場率、寄生密度とも平年並、普通期栽培では初発生時期が遅く、その後の発生量は少なかった。

### (5) ツマグロヨコバイ

早期栽培では初期の発生量は少なかったが、8月上旬以降平年並の発生量となった。

普通期栽培では平年並の発生量であったが、8月中旬以降一部の圃場で寄生密度が上昇した。この原因として、長期残効型の箱処理剤の出現によって、本田での防除実施率が減少していることとの関係が指摘された。

### (6) 斑点米カメムシ類

出穂期以前の発生量は平年並であったが、出穂期以降、発生圃場率が上昇し、やや多い発生量となった。発生量の多かった種類はアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメであった。

### (7) その他病害

早期栽培ではごま葉枯病の発生量がやや多く、ばか苗病、もみ枯細菌病、縞葉枯病、心枯線虫病は平年並、稲こうじ病の発生量は少なかった。

普通期栽培ではもみ枯細菌病、心枯線虫病の発生がやや多く、稲こうじ病、ばか苗病、ごま葉枯病の発生量は平年並であった。縞葉枯病の発生量はやや少なかった。

### (8) その他虫害

早期栽培ではヒメトビウンカの発生量がやや多く、コブノメイガ、イチモンジセセリ、ニカメイガ、イネミズゾウムシはやや少〜少ない発生量であった。

普通期栽培ではイネミズゾウムシ、コブノメイガ、イチモンジセセリの発生量がやや多く、ニカメイガ、ヒメトビウンカは平年並の発生量であった。

## 2. 大 豆

### (1) ハスモンヨトウ

8月中旬頃には広範囲に発生が認められたが、発生圃場率、寄生密度とも平年並推移した。

### (2) 吸実性カメムシ類

発生圃場率、寄生密度は平年並で推移した。

## 3. カンキツ

### (1) そうか病

葉での初発生は6月中旬で平年並、その後の発生量は平年並で推移した。

### (2) 黒点病

果実での初発生は6月中旬で平年並、その後平年並の発生量で推移した。

### (3) かいよう病

葉での初発生は4月下旬、果実での初発生は9月下旬でやや遅く、その後の発生量は平年並に推移した。

### (4) ヤノネカイガラムシ

枝での初発生は4月上旬で平年並、その後、平年並の発生経過であった。

(5) ミカンハダニ  
葉、果実での発生量はやや少なかった。

(6) アブラムシ類

初発生は4月下旬で平年並、8月下旬頃までは平年並の発生経過であったが、9月の降水量が少なかったため、その後の発生量はやや多く推移した。

(7) ミカンハモグリガ

初発生は6月中旬でやや遅かった。7月下旬までの発生量はやや多かったが、その後は平年並の発生量となった。

(8) ミカンサビダニ

被害果の初発生は8月下旬で平年並、その後の発生量は多く推移した。これは、夏期の高温少雨によってミカンサビダニの増殖に好適であったためと考えられた。

(9) クワゴマダラヒトリ

早春から広範囲に寄生を認め、その後も発生圃場率は高く経過した。

#### 4. モ モ

(1) せん孔細菌病

葉での初発生は4月下旬で平年並、8月下旬までは平年並の発生経過であったが、9月以降発病率が増加し、やや多い発生量となった。

(2) 灰星病

果実では7月中旬以降広範囲に発生を認めたが、発病率は低かった。

(3) ナシヒメシクイ

心折れの初発生は5月中旬でやや遅く、その後の発生量も平年並に推移した。

(4) モモハモグリガ

初発生は4月下旬で平年並であったが、その後の発生量は少なかった。

#### 5. ブドウ

(1) 晩腐病

7月中旬に露地栽培で発生を認めた。以降、平年並の発生経過であった。

(2) ベと病

初発生は施設栽培が6月中旬で平年並、その後、7～8月はやや少ない発生量であったが、9月以降、平年並の発生量となった。

(3) フタテンヒメヨコバイ

露地栽培での初発生は5月中旬で発生時期、その後の発生量は平年並であった。

#### 6. カ キ

(1) 炭そ病

果実での初発生は8月下旬で平年並、9月上旬～中旬の降雨により9月下旬にはやや多い発生量となったものの、10月以降は平年並の発生経過となった。

(2) うどんこ病

初発生は6月中旬でやや遅かった。その後、9月下旬までは発生圃場率、発病率とも低く推移したが、10月以降は平年並の発生量となった。

(3) カキノヘタムシカ#

被害果は、ほぼ平年並の7月中旬頃から見られはじめた。その後、被害果の発生量はやや多く推移した。

#### 7. 果樹共通

(1) カメモシ類

予察灯での初誘引は5月上旬で平年並であった。誘殺量は7月までのやや少なかく経過したが、8月以降漸増し、平年並となった。

(2) ハマキムシ類

フェロモントラップでの第1世代成虫の誘殺時期はやや早く、誘殺量はやや少なかった。

#### 8. キュウリ

(1) ベと病

春キュウリでは、6月中旬の降雨とともに発生圃場率、発病率とも増大し、やや多い発生量となった。

夏キュウリでは生育期から広範囲に発生し発病程度も高かったが、収穫期に入って平年並の発生量となった。

秋キュウリでは、生育期の発生量はやや少なかったが、収穫期に入って平年並の発生量となった。

(2) 炭そ病

春キュウリでの初発生は6月下旬でやや遅く、以降、平年並の発生量で経過した。

夏キュウリでの初発生は6月下旬でやや早く、生育期、収穫期を通してやや多い発生量で推移した。秋キュウリでは定植直後から発生を認めた。

生育期は発生量は平年並であったが、収穫期に入ってやや多い発生量となった。

(3) うどんこ病

春キュウリでの初発生は平年並、生育期は平年並の発生量で推移していたが、収穫期に入って発生圃場率が上昇しやや多発生となった。

夏キュウリでの初発生は6月下旬でやや早かった。以降、広範囲に発生を認めたが、発病程度は低かった。

秋キュウリでの初発生は9月下旬とやや遅く、発生量は平年並であった。

(4) 褐斑病

夏キュウリでの初発生は7月下旬で平年並であった。以降、発生圃場率は平年並、発病程度はやや高く推移した。

秋キュウリでは生育初期から発生を認めた。その後、収穫期に入って広範囲に発生したが、発病程度は低かった。

(5) 斑点細菌病

秋キュウリで発生を認めたが、発生量は終始平年並であった。

(6) モザイク病

春キュウリでは6月下旬から発生を認め、生圃場率は平年並、発病株率はやや低く推移した。

夏キュウリでの初発生は7月下旬で平年並、発生量はやや少なかった。

秋キュウリでは終始平年並の発生量で経過した。

(7) アブラムシ類

春キュウリでは5月下旬から発生を認め、発生量は終始平年並で経過しあった。

夏キュウリでの初発生は7月下旬でやや遅く、以降、発生圃場率、寄生密度ともやや低かった。

秋キュウリでは定植直後から寄生を認め、以降発生圃場率は低く、寄生密度は平年並で推移した。

## 9. キャベツ (冬キャベツ)

(1) 菌核病

11月下旬以降広範囲に発生を認めたが、発病株率は平年並であった。

(2) コナガ

栽培期間を通して発生圃場率、寄生密度とも低かった。

(2) モンシロチョウ

栽培期間を通して発生を認めた。初期は発生圃

場率、寄生密度とも高かったが、結球期以降平年並の発生量となった。

(3) ハスモンヨトウ

栽培期間を通して発生圃場率はやや高く、寄生密度はやや低く推移した。

## 10. タマネギ

(1) 白色疫病

初発生はやや遅かった。初期から発生圃場率、発病株率とも低く少発傾向にあり、その後、収穫期に入ってから発生量も少なかった。

(2) べと病

初発生は4月下旬と遅く、以降、収穫期まで少発生で推移した。

(3) ネギアザミウマ

初発生は2月中旬で平年並であった。その後生育期、収穫期を通して、終始、平年並の発生量で経過した。

## 11. ニンジン

(1) 黒葉枯病

初発生は9月下旬で平年並、以降、発生圃場率、発病株率ともやや低く経過した。

## 12. レタス

(1) 灰色かび病

春レタスでの初発生は3月下旬で平年並であった。以降、収穫期まで発生圃場率、発病株率ともほぼ平年並で経過した。

冬レタスでは年明けどり栽培で12月中旬以降発生を認めたが、発生圃場率、発病株率ともやや低く推移した。

(2) 菌核病

春レタスでの初発生は4月上旬でやや遅かった。生育期の発生圃場率は平年並であったが、結球期以降広範囲に発生した。発病株率は終始平年並であった。

冬レタスでは年明けどり栽培で12月中旬以降発生を認めたが、発生圃場率、発病株率とも平年並で推移した。

(3) 萎黄病

冬レタスの年内どり栽培で発生を認め、発生圃場率、発病株率ともやや高かった。

(4) モザイク病

春レタスでの初発生は4月上旬で平年並、以降、栽培期間を通して発生圃場率、発病株率ともやや低く経過した。

冬レタスでの初発生は10月下旬で平年並であった。その後、発生圃場率、発病株率ともやや低く経過した。

(5) アブラムシ類

春レタスでの初発生は3月下旬、初期の発生圃場率がやや高く多発傾向にあったが、結球期に

入って発生圃場率はやや低く、寄生程度は平年並となった。

冬レタスの内、年内どり栽培では定植直後から寄生を認めたが、発生量は終始平年並であった。年明どり栽培では発生圃場率、寄生株率ともやや低かった。

(6) ハスモンヨトウ

冬レタスの年内どり栽培で定植直後から広範囲に寄生を認め、寄生程度も高かった。

平成13年度 主要病害虫発生状況(香川県)

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
早期水稲 (6,751)			ニカメイガ(Ⅱ)	0	並
苗いもち	0	少	セジロウンカ	5,876	やや多
葉いもち	2,336	やや少	トビイロウンカ	191	少
穂いもち	324	少	ヒメトビウンカ	7,395	並
紋枯病	4,153	並	ツマグロヨコバイ	6,331	並
ばか苗病	338	並	イネゾウムシ	573	少
心枯線虫病	438	少	斑点米カメムシ類	2,656	多
もみ枯細菌病	324	並	イチモンジセセリ	5,685	やや多
ごま葉枯病	641	やや多	コブノメイガ	8,532	やや多
縞葉枯病	1,872	やや少	イネミズゾウムシ	2,274	やや多
稲こうじ病	0	少	ムギ類 (1,912)		
ニカメイガ(Ⅰ)	0	少	うどんこ病	196	やや少
ニカメイガ(Ⅱ)	191	少	赤かび病	265	やや少
セジロウンカ	5,907	並	大麦縞萎縮病	0	少
トビイロウンカ	257	並	斑葉病	203	並
ヒメトビウンカ	6,413	やや少	アブラムシ類	1,013	並
ツマグロヨコバイ	4,500	並	ダイズ (546)		
イネゾウムシ	1,073	並	ハスモンヨトウ(葉)	385	並
斑点米カメムシ類	4,737	多	吸実性カメムシ類	138	並
イチモンジセセリ	844	やや少	カンキツ (1,969)		
コブノメイガ	520	やや少	そうか病	197	並
イネミズゾウムシ	4,577	少	黒点病	1,181	並
普通期水稲 (9,096)			かいよう病	65	並
苗いもち	0	少	灰色かび病	591	並
葉いもち	2,656	やや少	ヤノネカイガラムシ	132	やや少
穂いもち	2,656	並	ミカンハダニ	788	やや少
紋枯病	6,176	並	ミカンサビダニ	262	多
ばか苗病	382	並	カメムシ類	30	並
心枯線虫病	1,956	やや多	チャノキイロアザミウマ	132	やや少
もみ枯細菌病	4,166	やや多	ナシマルカイガラムシ	65	やや少
ごま葉枯病	1,155	並	ロウムシ類	65	並
縞葉枯病	1,947	やや少	クワゴマダラヒトリ	394	やや多
稲こうじ病	1,137	並	ミカンハモグリガ	1,601	並
ニカメイガ(Ⅰ)	0	少	アブラムシ類	1,772	やや多

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
モモ (337)			ミナミキイロアザミウマ	0	少
黒星病	0	並	オンシツコナジラミ	10	やや多
せん孔細菌病	337	並	夏秋キュウリ (196)		
灰星病	112	並	べと病	137	並
炭そ病	0	並	炭そ病	164	やや多
縮葉病	75	並	疫病	0	少
ナシヒメシンクイ	225	並	うどんこ病	112	並
モモシンクイガ	0	並	褐斑病	118	並
モモノゴマダラノメイガ	0	並	斑点細菌病	33	並
コスカシバ	300	並	モザイク病	157	並
モモハモグリガ	19	少	アブラムシ病	72	並
ハダニ類	75	やや少	ヨトウガ	0	並
カメムシ類	10	並	ミナミキイロアザミウマ	39	やや少
アブラムシ類	19	並	オンシツコナジラミ	72	並
カイガラムシ類	0	並	冬キャベツ (143)		
ブドウ (295)			黒腐病	0	少
晩腐病	10	並	菌核病	24	やや多
さび病	40	並	モンシロチョウ	143	やや多
うどんこ病	0	並	コナガ	12	少
褐斑病	103	並	ヨトウガ	12	やや多
黒とう病	0	並	ハスモンヨトウ	60	やや多
べと病	245	並	タマネギ (423)		
灰色かび病	50	並	白色疫病	72	やや少
ブドウスカシバ	10	並	べと病	96	やや少
ブドウトラカミキリ	0	並	ボトリチス属菌による葉枯れ	55	少
フタテンヒメヨコバイ	97	並	ネギアザミウマ	383	並
チャノキイロアザミウマ	0	並	ニンジン (80)		
ハダニ類	29	やや多	黒葉枯病	20	少
ハマキムシ類	0	少	ヨトウガ	7	並
カイガムシ類	0	並	ネキリムシ類	0	並
カキ (302)			アブラムシ類	33	並
炭そ病	101	並	春レタス (280)		
うどんこ病	268	並	灰色かび病	163	並
落葉病	218	やや多	菌核病	210	やや多
カキノヘタムシガ	84	やや多	萎黄病	0	並
カイガラムシ類	134	やや多	モザイク病	47	やや少
カメムシ類	151	並	アブラムシ類	163	並
ハマキムシ類	0	少	ネキリムシ類	0	やや多
チャノキイロアザミウマ	0	並	ヨトウガ	0	少
カキクダアザミウマ	17	やや少	ハスモンヨトウ	0	並
冬春キュウリ (62)			冬レタス (800)		
べと病	58	やや多	灰色かび病	33	やや少
炭そ病	10	並	菌核病	67	やや少
疫病	0	並	萎黄病	117	やや多
うどんこ病	62	やや多	モザイク病	50	やや少
褐斑病	0	少	アブラムシ類	150	やや少
斑点細菌病	0	少	ネキリムシ類	33	やや少
モザイク病	41	並	ヨトウガ	0	少
アブラムシ類	41	並	ハスモンヨトウ	100	やや多
ヨトウガ	0	並			

# 愛 媛 県

(農林水産部農業経営課 岡本 充智)

## 1. 水 稲

### (1) 苗立枯病

一部の個人育苗でフザリウム、リゾプス属菌による発生がみられたが、発生面積は少なく、発生程度も低かった。

### (2) いもち病

苗いもちは、自家育苗を中心に早期栽培、普通期栽培の一部で発生した。発生面積、発生程度ともに軽微であった。

葉いもちは、早期栽培で中山間地域を中心に6月中旬以降発生がみられた。普通期栽培では南予で局部的な発生が一部でみられたが、一般的には発生面積は少なく、発生程度も低かった。

穂いもちは、早期・普通期栽培ともに発生がみられるが、発生面積、発生程度ともに軽微である。

### (3) 紋枯病

早期栽培では6月下旬、普通期栽培では7月下旬以降発生がみられはじめた。発生程度は低く、上位進展も緩慢であった。

### (4) ばか苗病

自家育苗で発生がみられたが、発生面積、発生程度ともに軽微であった。

### (5) ごま葉枯病

出穂期以降、常発水田、山間地水田を中心に発生した。発病時期はやや早かった。

### (6) 縞葉枯病

普通期栽培で発生がみられ、初期感染は少なく、後期感染が主体であった。

### (7) 萎縮病

発生はみられなかった。

### (8) ニカメイガ

第1世代の発生は平年並で、早期栽培で被害がみられた。全体的にも並の発生であった。

### (8) セジロウンカ

主な飛来は6月中旬～7月上旬に断続的にみられた。飛来時期はやや早く、飛来量は並であった。本田では密度が高い圃場が一部でみられたが、一般的に密度は低かった。

### (10) トビイロウンカ

初飛来の時期は平年に比べて遅く、また、主な飛来時期も遅かった。飛来量は少なかった。全般的に本田での発生密度は低く推移し、坪枯れの被害はみられなかった。

### (11) ヒメトビウンカ

7月以降、広範囲に発生がみられた。発生面積は平年並であったが、発生程度は低かった。

### (12) ツマグロヨコバイ

7月以降、広範囲に発生がみられ、8～9月に発生は増加傾向であったが、発生量は並であった。

### (13) 斑点米カメムシ類

発生時期は平年に比べて早く、6月より畦畔雑草地でみられた。発生面積は多く、発生程度も高かった。その後、稲の出穂に伴い、本田への飛来が多くみられるようになった。

発生地域は中山間が中心であったが、平坦部でも雑草地の隣接圃場では多くみられた。

発生種の主体はクモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、トゲシラホシカメムシ等であった。

なお、7月17日(早期・早植え)と8月29日(普通期)に注意報を発表した。

### (14) イチモンジセセリ

第1世代は5月より発生がみられはじめ、発生時期は早かったが、発生量は全県的に並であった。第2世代は7月より見られ、発生時期は平年に比べて早く、発生は並であった。

### (15) コブノメイガ

飛来時期はやや早く、飛来量は平年並と推察される。本田での被害の発生は7月上旬より目立ちはじめ、8月上旬、9月上旬には被害葉が急増した。発生面積、発生程度はやや多であった。普通期栽培の葉色の濃い圃場や作付けの遅い圃場での被害が多い傾向がみられた。

### (16) イネミズゾウムシ

早期栽培で程度は軽いが、移植直後より食害がみられた。発生面積、発生程度ともに並であった。

## 2. ムギ類

うどんこ病は少、黒穂病類、斑葉病は並、アブラムシ類はやや少発生であった。

赤かび病は、東予で少発生したが、中予・南予では発生は認められず、発生量は少であった。

## 3. 大豆

紫斑病は東予で局所的に発生し、発生程度は並であった。

ハスモンヨトウは、発生時期が早く発生量は多であった。8月15日に注意報を発表した。

## 4. 果樹

### 1) カンキツ

#### (1) そうか病

越冬病斑量は、平年並であった。常発地帯で新葉の初発が5月中旬とやや遅かった。

#### (2) 黒点病

枯枝量は平年並。果実発病は、7月上旬よりみられたが、以後急激な増加はなく、枯れ枝の多い園を中心に緩やかに増加した程度であり、発病程度も低かった。

#### (3) かいよう病

越冬病斑量は全県的にやや少。春葉での発病は軽微で、夏秋梢・果実の発病も少ない。

#### (4) ヤノネカイガラムシ

幼虫発生時期はやや早～並、発生程度は平年並であった。

#### (5) ミカンハダニ

梅雨明けまでは少発傾向で推移したが、梅雨明け以降発生が増加した。発生は園地間差が大きい。

#### (6) ミカンサビダニ

発生時期は並。発生は管理不良園を中心に、7月中旬より果実への寄生が認められ、8月以後発生面積が拡大し、発生はやや多であった。

#### (7) カメムシ類

越冬密度は極めて少なく、越冬成虫・新成虫の発生程度も少なかった。果実被害も認められない。フェロモントラップの誘殺数は9月下旬に増加してきており、注意が必要である。

#### (8) チャノキイロアザミウマ

発生程度は全県的に並であった。南予では8月中旬より園地への飛来量が増加した。発生程度・量ともに平年並。

#### (9) コナカイガラムシ類

東・中予ではフジコナカイガラムシが、南予ではミカンヒメコナカイガラムシが発生の主体である。発生程度は、全県的にやや少であった。

### 2) カキ

#### (1) 炭そ病

新梢発病は遅く、梅雨期以降常発園で発生。南予では常発地で8月下旬より果実に発病。発生程度は全県的に並であった。

#### (2) うどんこ病

新葉の発病は、5月下旬よりみられたが、病勢の進展は緩慢であった。発生程度は全県的にやや少であった。

#### (3) カキノヘタムシガ

発生時期は、第1世代、第2世代ともに並であった。発生程度は全県的に並であった。

#### (4) カキクダアザミウマ

5月上旬より成虫飛来が認められたが、被害は軽微であった。全県的に新葉の被害時期は平年並、発生程度は中予は並、東予、南予が少であった。

#### (5) フジコナカイガラムシ

発生時期はやや早かった。発生量は南予で多、東予、中予はやや多で、全県的に多であった。

#### (6) カメムシ類

越冬密度は極めて少なく、越冬成虫・新成虫の発生程度も少なかった。

## 5. 野菜

### (1) べと病

冬春キュウリでは、東予で作期を通して発生し、中予では10月、南予では9月より発生した。1月には一部圃場で病勢が進展した。

夏秋キュウリでは、東予、南予で定植直後から中予では7月から発生が見られた。南予の一部圃場では7月に病勢が進展したが、全県的には並発生であった。

タマネギでは、東予では3月、南予で5月より発生したが、病勢の進展は見られなかった。

### (2) 灰色かび病

冬春トマトでは、東・中予で12～1月、南予では3月より発生した。発生量は南予で生育中期に多発した圃場もみられたが、全県的に並発生であった。

夏秋トマトでは、東予、中予で6～7月より発

生したが、病勢が進展しなかった。南予では目立った発生は見られなかった。

### (3) うどんこ病

冬春ナスでは、東予で定植初期、中予では3月より発生したが、南予では6月より遅れて発生し、全県的にはやや遅い発生であった。

夏秋ナスでは、東予で6月、中予、南予では8月より発生したが、多発圃場はみられなかった。

冬春キュウリでは、作期を通して発生した。南予では6月以降やや多発したが、東予、中予では病勢の進展は見られなかった。

冬春イチゴでは、10～11月に発生し、年内の発病程度が高まったが、生育後半の発生は少なく経過した。

### (4) ハスモンヨトウ

サトイモでは、東予の早いところで7月、全体では8月以降発生し、一部圃場では密度の増加が見られたが、全県的には並発生であった。

冬春イチゴでは、一部では育苗期より、ほとんどの圃場では定植直後から多発したが、防除により密度増加が抑制された。

### (5) コナガ

冬キャベツ、春キャベツ、夏秋キャベツで、作期を通して発生したが、低密度で推移した。

### (6) アブラムシ類

冬春トマトでは、東予、南予で生育初期、中予では5月より発生した。全県的に密度の増加は見られなかった。

夏秋トマトでは、5～6月より発生したが、寄生密度の増加はみられなかった。

夏秋ナスでは、全県的に定植初期から発生が見られ、中予では密度の増加した圃場が見られた。

夏秋きゅうりでは、定植直後から発生した。中予では8月から寄生密度が急増したが、東予、南予では多発圃場はみられなかった。

サトイモでは、5～6月より発生したが、一部の圃場を除いて密度の増加は緩慢であった。

冬春イチゴでは、東予、南予は生育初期から、中予は11月より発生したが、1～4月には密度は低下した。5月以降、発生が見られたが全県的にはやや少発生であった。

そのままでは、12～1月より発生したが、密度の増加は見られなかった。

### (7) ミナキイロアザミウマ

冬春キュウリでは、東予、南予で定植直後から、中予では12月から発生が見られた。生育中期から圃場間の発生量の差が大きくなった。

夏秋キュウリでは、定植直後から発生したが、密度は増加しなかった。

### (8) マメハモグリバエ

冬春トマトでは、定植直後より作期を通して発生した。2～3月には密度が増加し一部では多発圃場がみられた。地域間で発生差が大きかった。

夏秋トマトでは、6～7月より発生した。中予では密度の増加した圃場が見られたが、全体では並発生であった。

冬春ナスで、東予、南予で定植初期、中予では4月より発生したが、生育後半は終息した。

夏秋ナスでは、東予で8月以降、中予、南予では5～6月に発生したが、目立った密度の増加は見られなかった。

夏秋キュウリでは、7～8月より発生し、一部の圃場では密度の増加が見られた。

### (9) その他

冬春トマトの葉かび病は、東予、中予で11～12月、南予では2月より発生した。中予では生育中期～後半にかけて多発した圃場も見られたが、全県的に並発生であった。

夏秋トマトの葉かび病は、6～7月より発生した。中予、南予では病勢が進展した圃場が見られた。

冬春キュウリの褐斑病は、作期を通して発生し、東予、南予では病勢の進展した圃場が見られた。

冬春キュウリの黄化えそ病は、南予では11月に地域全体で発生した。東予の発生は定植直後から散発的であった。中予では発生しなかった。半促成栽培では防除(保毒虫対策、発病株抜き取り)が徹底され、一部の発生にとどまった。

夏秋キュウリのモザイク病は、東予、中予で7月から、南予では8月から発生が見られた。生育後半にかけて一部圃場では病勢が進展した。

夏秋キュウリの褐斑病は、東予では生育初期より発生したが、病勢の進展は見られなかった。中予では目立った発生は見られなかった。南予では病勢の進展した圃場が多く見られた。

夏秋キュウリの黄化えそ病は、6月に東予、南予で発生し、その後終息したが、8月以降再び発生が増加した。中予では発生を認めていない。



春キャベツの菌核病は、中予、南予では1月より東予では3月より発生した。ここ数年発生圃場率が高くなってきている。

春キャベツの根こぶ病は、中予の一部地域で多発している。

ソラマメのモザイク病は、東予で年内から、中予では3月より発生したが、一部圃場を除き病勢は進展しなかった。

夏秋トマトのタバコガ類は、8月以降発生した

が、多発圃場は見られなかった。

冬春ナスのオンシツコナジラミは東予で定植初期、中予、南予では3月より発生し、4月以降密度の増加がみられた。

タマネギのネギアザミウマは、2月以降発生したが、初期密度の増加は見られなかった。5月より一部で発生密度が急増したが、全体的にやや少であった。

平成13年度 主要病害虫発生状況（愛媛県）

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
水稻 (16,929)			ヤノネカイガラムシ	1,950	並
苗立枯病	5	少	ミカンハダニ	12,860	並
苗いもち	15	少	ミカンサビダニ	237	やや多
葉いもち	1,940	少	カメムシ類	230	少
穂いもち	700	少	チャノキイロアザミウマ	1,880	並
紋枯病	6,445	やや少	コナカイガラムシ類	3,300	やや少
ばか苗病	485	少	カキ (1,003)		
ごま葉枯病	1,150	並	炭そ病	28	並
縞葉枯病	100	少	うどんこ病	558	やや少
萎縮病	0	—	カキノヘタムシガ	192	並
ニカメイガ 第1世代	293	並	カキクダアザミウマ	55	少
第2世代	165	並	フジコナカイガラムシ	161	多
セジロウンカ	15,500	並	カメムシ類	65	少
トビイロウンカ	80	少	冬春トマト (37)		
ヒメトビウンカ	6,700	並	灰色かび病	26	並
ツマグロヨコバイ	12,172	並	葉かび病	7	並
斑点米カメムシ類	4,495	多	アブラムシ類	8	やや少
イチモンジセセリ 第1世代	163	並	マメハモグリバエ	2	やや少
第2世代	3,120	並	夏秋トマト (166)		
コブノメイガ	9,330	やや多	灰色かび病	6	やや少
イネミズゾウムシ	3,350	並	葉かび病	31	やや多
ムギ類 (1,915)			アブラムシ類	23	並
うどんこ病	30	少	タバコガ類	15	並
赤かび病	150	少	マメハモグリバエ	25	並
黒穂病類	622	並	冬春ナス (41)		
斑葉病	68	並	うどんこ病	2	並
アブラムシ類	246	やや少	オンシツコナジラミ	3	やや多
大豆 (461)			マメハオリバエ	2	並
紫斑病	10	並	夏秋ナス (219)		
ハスモヨトウ	335	多	うどんこ病	14	並
カンキツ (19,830)			アブラムシ類	52	並
そうか病	493	やや少	マメハモグリバエ	20	並
黒点病	7,260	少	冬春キュウリ (86)		
かいよう病	1,625	少	べと病	72	並

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
うどんこ病	32	並	根こぶ病	1	多
褐斑病	11	やや多	夏秋キャベツ (82)		
ミナミキイロアザミウマ	30	やや少	コナガ	29	やや少
黄化えそ病	14	—	タマネギ (426)		
夏秋キュウリ (244)			べと病	35	少
べと病	107	並	ネギアザミウマ	220	やや少
モザイク病	70	やや多	サトイモ (495)		
アブラムシ類	93	並	アブラムシ類	391	並
マメハモグリバエ	5	やや多	ハスモンヨトウ	326	並
ミナミキイロアザミウマ	73	やや少	冬春イチゴ (137)		
褐斑病	72	やや多	うどんこ病	43	並
黄化えそ病	2	—	アブラムシ類	25	やや少
冬キャベツ (121)			ハスモンヨトウ	38	やや多
コナガ	23	少	ソラマメ (127)		
春キャベツ (157)			モザイク類	27	やや少
菌核病	5	やや多	アブラムシ類	45	やや少
コナガ	18	少			

# 高 知 県

(農林水産部農業技術課 松本 宏司)

## 1. 水 稲

### (1) いもち病

早期稲では、葉いもちの発生が、6月上旬から一部常発地でみられた。その後、梅雨入りとともに発生は漸増傾向となったが、全般的に少発生であった。穂いもちも全般的に少発生であった。普通期稲では、葉いもちの発生が、6月中旬よりみられたが、7月にかけて比較的天候が安定していたことから発生は少なく推移し、8月に入ってから発生面積の増加はみられず、平年並みとなった。中山間地の一部のほ場では、やや発病程度の高いほ場もみられた。また、穂いもちも中山間地の一部のほ場で発生が多くみられた。

### (2) 白葉枯病

早期稲、普通期稲ともに県中西部、西部の一部で発生がみられた程度であり、少発生であった。

### (3) 紋枯病

早期稲では、6月中旬より発生がみられ、全般的には少発生であった。普通期稲では、初発時期は7月中旬で、全般的に平年並で推移したが一部で激発ほ場もみられた。

### (4) 疑似紋枯病

早期稲、普通期稲ともに発生はみられなかった。

### (5) ごま葉枯病

早期稲では、発生がみられなかった。普通期稲では、発生はやや遅く、その後も平年並の面積で推移していたが、出穂時期より増加し、収穫期には激発ほ場もみられ、全般的に多発生であった。

### (6) ばか苗病

早期稲、普通期稲ともに少発生であった。

### (7) もみ枯細菌病

県中央部の早期稲で一部発生がみられたが、全体的に少発生であった。

### (8) 黄化萎縮病

早期稲、普通期稲ともに少発生であった。

### (9) ニカメイガ

早期稲では、県中西部で平年より発生が多かったが、他の地域は平年より少なく、全般的には平年並みであった。普通期稲では、7月に県中西部で発生がみられはじめ、多発生で推移したが、他

の地域で発生が少なかったため、全般的には平年並みの発生であった。

### (10) ツマグロヨコバイと萎縮病

早期稲、普通期稲とも6月以降、全般的に発生がみられたが、発生程度は低いほ場が多く、特に問題とならない程度であった。

また、萎縮病の発生はみられなかった。

### (11) ヒメトビウンカと縞葉枯病

早期稲、普通期稲とも県西部で発生面積が多かったが、寄生密度は低く、特に問題とならない程度の発生であった。また、縞葉枯病の発生はみられなかった。

### (12) セジロウンカ

早期稲では、6月に県西部で多発生となったが、全般的に寄生密度は低く、防除により収穫前には発生面積も減少し、吸汁による被害はみられなかった。

普通期稲でも平年に比べ多めの発生であったが、密度の高いほ場はみられなかった。

### (13) トビイロウンカ

飛来時期は7月中旬で、平年より少なく推移し、全般的に少発生であった。

### (14) コブノメイガ

早期稲、普通期稲とも、県西部で6月から発生がみられ、7月には他の地域でも発生がみられた。県西部では、発生面積が多めで推移したが、他の地域でやや少なめであったため、全般的には平年並みの発生であった。

### (15) イネミズゾウムシ

県中央部、中西部で発生が多かったものの、寄生密度は低く、実害はみられなかった。

### (16) 斑点米カメムシ類

早期稲、普通期稲ともに、作期中の天候が良かったため、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシを中心に寄生密度が高く多発生となった。

### (17) スクミリンゴガイ

早期稲では、4月の移植直後から被害はみられ、既発生ほ場以外でも発生が拡大する傾向にあり、全般的に多めの発生となった。普通期稲では、既

発生ほ場や平野部を中心に発生面積の拡大がみられたが、実害はほとんどなかった。

## 2. 果 樹

### 1) カンキツ

#### (1) そうか病

温州みかん、中晩柑類とも、多発生となった。常発園では5月より発生し、梅雨時期に病勢が拡大傾向になり、果実での病斑もみられた。しかし、8月以降、天候が良かったことから、病勢の進展は緩慢となり、摘果等により収穫期には罹病果が殆どみられなくなった。

#### (2) 黒点病

温州みかん、中晩柑類とも平年並の発生であった。殆どの果実で発病がみられたほ場もあったが、発病程度は低かった。

#### (3) かいよう病

昨年は発生が少なく、本年は越冬病斑が少なかったこと、台風による影響が少なかったこと、基幹防除である発芽前散布が広範囲に行われていたこと等により、温州みかん、中晩柑類ともに平年より少発生であり、発病程度も低かった。

#### (4) ヤノネカイガラムシ

冬期の寒風害により寄生していた葉が落葉したこと、天敵の寄生が多くみられたこと等により寄生密度が減少し、実害のない程度の発生であった。温州みかんの一部の園でのみ発生がみられた程度であった。

#### (5) ミカンハダニ

温州みかん、中晩柑類とも、越冬密度は全般的に低かったが、6月以降発生面積・寄生密度とも拡大し、その傾向は8月まで続いた。しかし、9月に入ってからまとまった降雨があり、寄生密度は急激に減少した。温州みかんではやや多め、中晩柑類では平年並の発生であった。

#### (6) カメムシ類

昨秋のスギ、ヒノキのビーティング調査による新成虫発生量は多かったものの、ほ場へのカメムシ類飛来量は少ないまま推移した。温州みかん、中晩柑類とも、昨年からの成虫の越冬個体数が平年に比べ少なかったため、本年豊作になったスギ、ヒノキ毬果に対して、新成虫が相対的に少なくなったためと思われる。

## 3. 野 菜

### 1) 施設キュウリ

#### (1) うどんこ病

県中央部、中西部は調査開始期より発病が確認され、その後も平年より多発生で推移した。

県西部は概ね平年並の発生であった。栽培初期を中心に発生がみられ、下位葉での発生が殆どで、上位葉への進展がみられたほ場は少なかった。

#### (2) べと病

全般的に、調査開始期より発病が確認され、その後ほとんどのほ場で発生がみられるようになった。9月以降、降水量が多かったこともあり、病勢の進展は早く、作の前半から発病程度の高いほ場が多かった。

#### (3) 灰色かび病

12月から発生がみられたが、発病果率の高いほ場は殆どなく、県中央部は少発生で、中西部、西部では平年並であった。

#### (4) 菌核病

全般的に11月から発生し始めたが、発病果率の高いほ場はみられず、少発生であった。

#### (5) モザイク病

ZYMV、CMV、WMV 2などの発生がみられたが、県中央部は平年より少、西部は平年並の発生で推移した。県中西部は11月に多発したものの、その後は少発生であった。

#### (6) 黄化えそ病

栽培初期から発生がみられた。土佐市、春野町などでは地域全体に蔓延しており、ほ場によっては、数十本単位での、罹病株の除去が行われた。

#### (7) ハスモンヨトウ

栽培初期を中心に多発したが、気温の低下とともに密度は減少し、年明け以降は殆どみられなくなった。

#### (8) ミナミキイロアザミウマ

栽培初期から発生がみられ、県中央部、西部は平年並の発生、中西部は調査開始期より平年並みの発生で推移した。

#### (9) アブラムシ類

一部のほ場でワタアブラムシ、モモアカアブラムシの発生がみられ、県中央部、西部は平年より少発生、県中西部は平年よりやや多発生で、全般的には、やや多めの発生であった。

### 2) 施設ナス

#### (1) 青枯病

県東部では、10月から発生がみられ、平年並みで推移した。県中央部は、10月から発生がみられ、やや多めで推移した。全般的には、ほぼ平年並みの発生であった。

#### (2) 灰色かび病

12月から発生がみられ、その後増加したが、全体として平年に比べ少なめの発生で推移した。

#### (3) すすかび病

マルハナバチの普及により、殺菌剤も含めた防除回数が減ってきたこと、効果的な防除薬剤がないこと、防除が遅れたこと等から多発した。県東部では、本病により落葉したほ場もあった。

#### (4) ハスモンヨトウ

野外での密度は平年より高かったものの、ハウスでは防除が徹底され、平年より少なめの発生であった。

#### (5) ミナキイロアザミウマ

定植後から、ほぼ平年並の発生で推移したが、気温の低下とともに減少傾向になり、やや少なめで推移した。3月以降は気温の上昇とともにやや漸増した。県中央部は平年よりやや多め、県東部はやや少なめの発生であり、全般的には、平年並の発生であった。

#### 3) 施設ピーマン

##### (1) うどんこ病

11月から発生がみられ始めた。全般的に多発生であり、県中西部では発病程度の高いほ場もみられた。

##### (2) 斑点病

県中西部では12月まで、平年より多めで推移したが、その後は平年並みの発生となった。

県東部・中央部は平年並みからやや少なめで推移した。全般的にほぼ平年並の発生となった。

##### (3) モザイク病

県東部・中西部で育苗期から定植初期にCMVを主体に発生がみられたが、その後の進展は緩慢であり、全般的には少発生で推移した。一部ではTMVの発生が認められた。

#### (4) 青枯病

定植後に気温が高めに推移したことから、栽培初期から発生がみられたが、病勢の進展は緩やかであったため、平年並の発生となった。

#### (5) ハスモンヨトウ

定植直後の10月から多くのほ場で発生がみられたが、気温の低下とともに減少した。全般的に、ほぼ平年並みの発生となった。

#### (6) ミナキイロアザミウマ

栽培期間をとおして、発生が認められた。県東部では、平年に比べ少なめ、中央部・中西部では、ほぼ平年並の発生で推移した。全般的には、平年並の発生であった。

#### (7) ヒラズハナアザミウマ

突発的に多発が確認されたものの、全般的には少発生であった。天敵類を利用した防除も一因として考えられる。

#### (8) アブラムシ類

モモアカアブラムシ、ワタアブラムシの発生がみられた。平年に比べ多めの発生であったが、芯止まりなど、実害のあったほ場は殆どみられなかった。

#### 4) 施設トマト

##### (1) 灰色かび病

12月に発生がみられたが、全般的には少なめの発生となった。

##### (2) 青枯病

秋期に一部のほ場で発生がみられたものの、春期以降の発生は少なく、全般的に少発生であった。

##### (3) 萎ちょう病

巡回ほ場での発生はみられず、少発生であった。

##### (4) 根腐萎ちょう病

常発圃場で発生がみられただけであり、少発生であった。

##### (5) 葉かび病

防除の徹底等により、平年より少なめの発生となった。

##### (6) アブラムシ類

一部のほ場でワタアブラムシの発生がみられた程度であり、少発生であった。

##### (7) ハスモンヨトウ

生育初期の10月から、中央部では寄生株率が平年よりやや高かったが、1月以降の発生は少なくなった。全般的に平年並みの発生であった。

##### (8) オンシツコナジラミ

生育初期から一部のほ場で散見されたが、収穫後期の4月には寄生株率は低く、発生面積も概ね

平年並みで推移した。

(9) シルバーリーフコナジラミ

生育初期から一部のほ場で散見され、ほぼ平年並みの発生で推移した。

(10) マメハモグリバエ

平年よりやや少なめの発生であった。下位葉中心の発生であり、実害はみられなかった。

平成13年度 主要病害虫発生状況（高知県）

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
水稲 (14,296)			シルバーリーフコナジラミ	135	多
いもち病 (葉いもち)	2,142	少	アブラムシ類	19	少
〃 (穂いもち)	1,102	少	ヒーマン (シシトウを含む)		
白葉枯病	101	少	(冬春172 夏秋63)		
紋枯病	1,882	少	うどんこ病	142	多
疑似紋枯病	0	—	斑点病	102	並
ごま葉枯病	1,465	多	モザイク病	20	少
ばか苗病	0	—	青枯病	43	並
もみ枯細菌病	40	少	ハスモンヨトウ	150	並
黄化萎縮病	0	少	ミナミキイロアザミウマ	130	並
ニカメイガ	636	並	ヒラズハナアザミウマ	161	少
ツマグロヨコバイ	1,776	並	アブラムシ類	50	多
萎縮病	0	少	ナス (冬春412 夏秋65)		
ヒメトビウンカ	587	並	黒枯病	79	少
縞葉枯病	0	少	青枯病	124	並
セジロウンカ	2,332	多	灰色かび病	208	少
トビイロウンカ	220	少	すすかび病	337	多
コブノメイガ	1,222	並	ハスモンヨトウ	278	やや少
イネミズゾウムシ	10,997	多	ミナミキイロアザミウマ	315	並
斑点米カメムシ類	10,901	多	アブラムシ類	130	やや少
スクミリンゴガイ	1,983	やや多	ショウガ (ハウス31 露地466)		
カンキツ (1,855)			根茎腐敗病	62	多
そうか病	704	多	アワノメイガ	173	多
黒点病	1,621	並	ハスモンヨトウ	189	多
かいよう病	120	少	オクラ (ハウス20 露地91)		
ヤノネカイガラムシ	49	少	葉すす病	50	多
ミカンハダニ	1,807	並	ハスモンヨトウ	67	多
ミカンハモグリバエ	893	並	アブラムシ類	59	並
訪花昆虫	0	少	スイカ (冬春60 夏秋79)		
カメムシ類	186	少	うどんこ病	28	並
キュウリ (冬春230 夏秋41)			つる枯病	5	少
うどんこ病	145	多	ハダニ類	10	並
べと病	219	多	ミナミキイロアザミウマ	32	並
灰色かび病	33	並	アブラムシ類	7	少
モザイク病	31	並	メロン (ハウス415)		
斑点細菌病	10	多	うどんこ病	384	多
ハスモンヨトウ	186	並	べと病	13	並
ミナミキイロアザミウマ	139	並	ミナミキイロアザミウマ	384	多
オンシツコナジラミ	99	少	オンシツコナジラミ	346	多

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
シルバーリーフコナジラミ	75	多	葉かび病	9	並
トマト(冬春26 夏秋28)			根腐萎ちょう病	3	少
灰色かび病	4	少	アブラムシ類	11	少
青枯病	6	少	ハスモンヨトウ	11	並
モザイク病	3	少	オンシツコナジラミ	11	並
疫病	4	やや少	シルバーリーフコナジラミ	9	並
萎ちょう病	2	やや少	マメハモグリバエ	11	少

# 平成14年度の病害虫発生の特徴とその対策並びに防除上の問題点

## 徳 島 県

(農林水産部農業経営課 前田 弘之)

### 1. 水 稲

#### (1) いもち病

早期栽培での葉いもちの初発生の確認は平年より約半月遅い6月10日頃であり、発生量も少なかった。その後も、発生面積、発病度ともにやや増加したものの、全般に少発生のままで推移した。上位葉への進展は見られなかった。

穂いもちの発生は、葉いもち病の発生が少なかったことに加え7月から8月の降水量が非常に少なかったため、7月下旬に発生を確認したものの、発生面積、発病穂率ともに平年を下回った。その後、発生面積は増加したものの発病穂率は変わらず、平年より少なめの発生となった。

普通期栽培での葉いもちの初発生の確認は平年より約半月遅い6月下旬頃であり、発生量も少なかった。その後も、発生面積、発病度ともにやや増加したものの、全般に少発生のままで推移した。

穂いもちの発生は8月中旬に発生を確認したものの、発生面積、発病圃場率ともに低いままで推移し、全般的に平年より少なめの発生となった。

#### (2) 紋枯病

早期栽培では、平年並の6月下旬頃から発生が認められ、発生面積、発病株率とも平年並であった。その後も8月上旬頃まで漸増傾向にあったものの概ね平年並の発生で経過した。

普通期栽培では、平年並の7月上旬頃から発生が認められ、発生面積、発病株率とも平年並であった。7月下旬にやや発生が多くなったものの、その後は概ね平年並の発生で経過した。防除は混合剤によりウンカ類との同時防除が行われた。

#### (3) セジロウンカ

予察灯への初誘殺は平年より10日遅い6月11日に確認された。早期栽培の圃場では平年並の6月中旬頃から発生が認められたが、発生面積、虫数ともに少なめであった。その後も7月下旬頃まで漸増傾向であったが、発生量は平年と比べて少なめであった。普通期栽培の圃場では平年並の6月中旬頃から発生が認められたが、発生面積、虫数ともに少なめであった。その後は7月下旬頃まで

漸増傾向、それ以後は減少したが、発生量は平年と比べて少なめであった。防除は混合剤により、紋枯病との同時防除が行われた。

#### (4) トビイロウンカ

予察灯への誘殺は認められず、圃場での生息は早期水稻、普通期水稻ともにほとんど確認されなかった。防除は混合剤による紋枯病との同時防除及び粉剤、液剤による本田防除が行われた。一部では苗箱処理剤の施用が行われた。

#### (5) 斑点米カメムシ類

早期水稻を対象とした6月下旬～7月上旬にかけての周辺雑草地調査での生息密度は平年並であり、本田への侵入も少なかった。

7月に行なった普通期水稻を対象とした周辺雑草地調査での生息密度は平年よりやや高かった。8月以降の本田調査においても生息密度は平年よりやや高かった。出穂を迎える圃場での増加が予想されたため、8月2日には普通期水稻で注意報を発令し、防除を呼びかけた。その後は発生面積が多かったものの、本田での生息数は平年並であった。全般的に平年並みの発生であった。

薬剤によるカメムシ防除は基幹防除には組み入れておらず、主にいもち病、ウンカ類との同時防除で出穂直前から穂揃い期にかけて粉剤、液剤による防除が行われているが、実施率は6割程度である。また、市街地周辺では粒剤体系が増加しており、斑点米カメムシに対しては効果がない。

#### (6) イネクロカメムシ

早期栽培では平年並の7月上旬頃から8月中旬頃まで発生が認められた、発生量は平年並からやや少なめで推移した。

普通期栽培では、平年並の7月上旬頃から8月下旬頃まで発生が認められた。発生量は平年並からやや多めで推移した。

#### (7) コブノメイガ

早期栽培では平年より約半月遅い7月中旬以降発生が見られたが、被害量は少なかった。

普通期栽培では、平年並の7月下旬以降発生が見られた。発生面積はやや多かったものの、被害



量は平年並〜やや少なめであった。

#### (8) イネミズゾウムシ

早期水稻での本田への侵入は平年並の4月5半旬に認められ、発生面積、生息虫数ともに平年とほぼ同程度の発生であった。普通期水稻では、本田への侵入は平年並の5月5半旬に認められ、発生面積、生息虫数ともに平年とほぼ同程度の発生であった。予察灯への初飛来、誘殺虫数は平年並みであった。

## 2. 果 樹

### 1) 果樹共通

#### (1) カメムシ類

3月に実施したチャバネアオカメムシの越冬調査では9地点のうち7地点で越冬成虫が確認された。虫数は1.8頭/㎡であり、昨年(11地点調査で未確認)、一昨年(13地点のうち5地点で確認、0.6頭/㎡)と比べて越冬密度が高かった。

予察灯への初誘殺は平年(4月20日)より早い4月8日に確認された。5月に入ってからは予察灯、集合フェロモントラップとともに誘殺数が急増し、平年と比べて非常に多かった、しかしながら、8月中旬以降の誘殺数は激減し、平年より少なめとなった。

山林でのスギ、ヒノキの毬果着果量が少なかったために、餌を求めて果樹カメムシ類の山林からの離脱が早まると思われたが、果樹園への飛来は少なく、被害もほとんど見られなかった。これは、ヒノキ毬果着果量が少なかったため、新世代の増殖が抑制されたことが原因と考えられる。

### 2) カンキツ

#### (1) そうか病

平年並の5月中旬頃から発生が認められ、発生面積、発生量もほぼ平年並であった。その後は、発生面積は平年よりやや多めであったが、発生量は平年並〜やや少なめで推移した。発芽直後と落弁期の2回、薬剤による防除が行われた。

#### (2) 黒点病

ほとんど発生が認められなかった。

#### (3) かいよう病

平年並の5月中旬頃から発生が認められ、発生面積、発生量もほぼ平年並であった。その後は、8月中旬頃に発生面積が平年よりやや多めとなったが、発生量は概ね平年並で推移した。展葉期と幼果期に薬剤防除が行われた。

#### (4) ミカンハダニ

平年並の5月中旬頃から発生が認められたが、発生面積、発生量ともに平年より少なかった、6月には急増し、発生面積、発生量ともに平年よりやや多めとなった。夏期には漸減していたが、9月に入ってからは再び増加しはじめ、ほぼ平年並の発生となっている。

### 3) ナ シ

#### (1) 黒星病

平年並の4月下旬頃から発生が認められ、発生量も平年並であった。5月にはいと発生量は漸減し、6月中旬以降はほとんど発生が認められなかったが、8月に一部の圃場において果実での発生が見られた。

#### (2) 輪紋病

ほとんど発生が認められなかった。越冬いぼ数が少なかったことに加え、感染期である梅雨期に降雨が少なかったため、全般的に少発生で推移した。

#### (3) うどんこ病

平年より約半月早い6月下旬頃から発生が認められ、以後も漸増していったが、発生面積、発生量ともに概ね平年並で推移した。

#### (4) ナシヒメシンクイ

フェロモントラップへの誘殺は平年より約10日早かった。誘殺数はほぼ全期間を通して平年並〜やや少なめで推移した。圃場での被害もほとんど見られなかった。

フェロモントラップ設置による適期防除、一部地域においては、コンヒューザーPによる交信攪乱が行なわれている。

#### (5) ハダニ類

平年より約半月早い6月中旬頃から発生が見られた。発生量は概ね平年並〜やや少で推移した。

#### (6) アブラムシ類

平年並の5月中旬頃から発生が見られた。発生面積はほぼ平年並であったが、発生量はやや少なかった。

### 4) カ キ

#### (1) 落葉病類

角斑落葉病は、平年並の7月下旬頃から発生が見られはじめ、後漸増していった。発生面積、発生量ともに概ね平年並であった。円星落葉病は平年並の9月下旬頃から発生が認められたものの、発生量は少なかった。

### 3. 野菜

#### 1) 野菜共通

##### (1) ハスモンヨトウ

フェロモントラップへの誘殺は平年よりやや遅い4月中旬頃から認められた。誘殺虫数は10月中旬頃にやや多くなったものの、概ね平年並で推移した。

圃場では7月中旬頃から夏秋ナス、レンコンなどに寄生が認められ、特にレンコンでは多発生圃場が目立った。現在はレタスやアブラナ科野菜に寄生が認められるが、発生量は平年並である。

#### 2) 冬春トマト

##### (1) 灰色かび病

平年並の12月中旬頃から発生が認められ、以後ほぼ全期間を通して平年並の発生で推移した。

#### 3) 冬春ナス

##### (1) うどんこ病

平年並の10月下旬頃から発生が認められたものの、発生面積、発生量ともに平年より少ないままで経過した。

##### (2) すずかび病

平年よりやや遅い12月中旬頃から発生が認められた。以後の発生量は平年並～やや多で推移した。アゾキシストロビン系を中心とした防除が行われた。

##### (3) 灰色かび病

平年よりやや遅い2月下旬頃から発生が認められたものの、発生面積、発生量ともに平年より少ないままで経過した。

#### 4) 夏秋ナス

##### (1) うどんこ病

平年より約1月遅い7月下旬頃から発生が認められ、発生面積、発生量ともに平年並であった。以後9月下旬まで漸増するも、発生面積、発生量ともに平年よりやや少なめで経過した。

##### (2) 褐色腐敗病

7月下旬頃に一部の圃場において認められたものの、ほとんど発生がなかった。

#### 5) 冬春キュウリ

##### (1) べと病

平年並の12月中旬頃から発生が認められた。発生面積は平年並であったが、発生量は平年並～やや少で推移した。

##### (2) 灰色かび病

ほとんど発生が認められなかった。

#### 6) 秋冬ネギ

##### (1) シロイチモジヨトウ

平年より約1月遅い8月下旬頃から発生が認められている。寄生虫数はやや少なめであるが、発生面積は平年より多く、若齢幼虫による食害が目立つ。

#### 7) 冬春ホウレンソウ

##### (1) べと病

12月中旬の巡回調査では、発生圃場率が41.7%、平均発病度が1.6であり、平年と比べて発生が多かった(栽培品種の変遷に伴い、過去3年間はこの時期までには発生を認めていない)。その後も1～2月にかけては、発生面積、平均発病度ともに増加傾向で推移した。3月に入りやや減少したものの、ほぼ全期間を通して平年より多めの発生であった。

独立行政法人農業技術研究機構野菜茶業研究所葉根菜研究部病害研究室の佐藤衛氏に病原性検定を依頼したところ、R1～R4すべてに抵抗性を持つジョーカー、アールフォーにも発病が認められ、新レースの存在が示唆されている。

#### 8) 冬春イチゴ

##### (1) うどんこ病

育苗中から発生が認められたが、発生量は少なかった。本圃では10月下旬頃から発生が見られはじめ、11月から12月に一部に多発生圃場も見受けられた。しかし、全般にはやや少なめの発生のまま推移した。

##### (2) 灰色かび病

ほとんど発生が認められなかった。

##### (3) アブラムシ類

本圃定植直後の9月下旬に多発生圃場が散見され、10月下旬頃までは平年よりやや多めの発生で推移した。その後の発生は減少し、ほぼ平年並の発生で経過した。

##### (4) ハダニ類

本圃定植直後の9月下旬に多発生圃場が散見された。その後の発生は減少し、ほぼ全期間を通して、平年並～やや少なめの発生で経過した。

#### 9) ハス

##### (1) 褐斑病

発生面積は多くほとんどの圃場において発生が見受けられたが、多発圃場は少なく大部分の圃場は少発生であった。

平成14年度 主要病害虫発生状況（徳島県）

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
早期イネ (6,950)			赤星病	73	やや多
苗立枯病	5	やや少	うどんこ病	255	並
苗いもち	10	やや少	輪紋病	3	少
葉いもち	1,580	少	カメムシ類	18	やや少
穂いもち	1,100	少	ナシヒメシクイ	5	やや少
紋枯病	4,400	並	ハダニ類	36	やや少
ニカメイガ	0	並	アブラムシ類	167	並
セジロウンカ	2,850	やや少	モモ (69)		
トビロウンカ	0	少	コスカシバ	2	やや少
ツマグロヨコバイ	5,600	並	カキ (368)		
イネクロカメムシ	480	やや少	炭そ病	36	並
斑点米カメムシ	990	並	うどんこ病	146	やや少
コブノメイガ	740	やや少	落葉病類	212	並
イネミズゾウムシ	4,750	並	カメムシ類	30	
普通期イネ (7,350)			冬春トマト (50)		
苗立枯病	5	少	疫病	10	やや多
苗いもち	5	少	灰色かび病	15	並
葉いもち	3,250	やや少	オンシツコナジラミ	29	やや少
穂いもち	1,050	少	夏秋ナス (150)		
紋枯病	5,565	やや多	うどんこ病	74	並～やや少
ニカメイガ	110	並	褐色腐敗病		少
セジロウンカ	3,850	やや少	冬春ナス (34)		
トビロウンカ	30	少	灰色かび病	3	少
ツマグロヨコバイ	4,830	やや多	すすかび病	30	並～やや多
イネクロカメムシ	1,155	やや多	ミナミキイロアザミウマ	26	やや多
斑点米カメムシ	2,100	やや多	冬春キュウリ (52)		
コブノメイガ	1,785	並	べと病	25	やや少
イネミズゾウムシ	940	並	灰色かび病		
ムギ (219)			ミナミキイロアザミウマ	10	少
さび病類	50	少	夏ネギ (51)		
うどんこ病	10	少	さび病	5	並
赤かび病	40	少	ネギアザミウマ	25	並
サツマイモ (1,280)			秋冬 (109)		
ナカジオシタバ	1,140	やや多	シロイチモジヨトウ	100	並～やや多
ハスモンヨトウ	1,140	やや多	冬春ホウレンソウ (873)		
ハダニ類	640	並～やや少	べと病	346	多
カンキツ (2,454)			アブラムシ類	524	並
そうか病	1,630	並～やや少	冬春イチゴ (111)		
黒点病	20	少	うどんこ病	48	並
かいよう病	320	並	アブラムシ類	47	並
ヤノネカイガラムシ			ハダニ類	34	やや少
ミカンハダニ	2,120	やや多	ハス (610)		
ミカンサビダニ	480	並	褐斑病	600	並～やや少
ナシ (284)			ハスモンヨトウ	600	多
黒星病	37	やや少			

# 香 川 県

(農林水産部農業経営課 牛田 泰裕)

## 1. 水 稻

### (1) いもち病

早期栽培の一部の圃場で苗いもちの発生を認めた。

早期栽培では6月中旬から葉いもちの発生を認め、平年並の初発生であった。初期の発病株率はやや高かったが、夏期の高湿小雨によって停滞気味に推移し、収穫期の発生量はやや少なかった。

普通期栽培での葉いもちの初発生は7月上旬で平年並、その後、発生圃場率は平年並、発病株率はやや低く推移した。

### (2) 紋枯病

早期栽培では6月下旬から発生を認め、平年並の初発生であった。初期は広範囲に発生を認め、多発傾向にあったが、収穫期に入って平年並となった。

普通期栽培での初発生時期は平年並であったが、夏期の高湿により発病株率が急増し、やや多い発生量となった。

### (3) セジロウンカ

飛来時期がやや遅く、初期の発生量は少なかった。収穫期に入るとの発生量は普通期栽培では平年並、早期栽培では少なかった。

### (4) トビイロウンカ

早期栽培、普通期栽培とも発生を認めなかった。

### (5) ツマグロヨコバイ

早期栽培では初期の発生量は少なかったが、8月上旬以降平年並の発生量となった。

普通期栽培でも初期の発生量は少なかったが、8月中旬以降広範囲に発生を認めた。

### (6) 斑点米カメムシ類

早期栽培では出穂期以降広範囲に発生、寄生密度も高かった。発生量の多かった種類はホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、アカスジカスミカメであった。

普通期栽培でも出穂期前後に多発生したが、以降の発生量は減少した。

### (7) その他病害

早期栽培ではごま葉枯病、ばか苗病、もみ枯細

菌病、縞葉枯病、心枯線虫病が平年並、心枯線虫病、稲こうじ病の発生量は少なかった。

普通期栽培では心枯線虫病の発生がやや多く、もみ枯れ細菌病、ばか苗病の発生量が平年並であった。縞葉枯病、稲こうじ病、ごま葉枯病の発生量はやや少～少なかった。

### (8) その他虫害

早期栽培ではヒメトビウンカの発生量がやや多く、コブノメイガ、イチモンジセセリ、ニカメイガ、イネミズゾウムシはやや少～少ない発生量であった。

普通期栽培ではイネミズゾウムシの発生量がやや多く、コブノメイガ、イチモンジセセリの発生量が平年並、ニカメイガ、ヒメトビウンカの発生量はやや少～少なかった。

## 2. 大 豆

### (1) ハスモンヨトウ

8月中旬頃には広範囲に発生、9月以降寄生密度も上昇し多発生となった。

### (2) 吸実性カメムシ類

8月中旬頃には広範囲に発生を認め、寄生密度も高かったが、9月以降減少した。

## 3. カンキツ

### (1) そうか病

葉での初発生は5月中旬でやや早かったが、果実での発生は7月中旬で平年並であった。発生量は平年並で推移した。

### (2) 黒点病

果実での初発生は6月中旬で平年並、その後平年並の発生量で推移した。

### (3) かいよう病

葉での初発生は4月下旬、果実での初発生は8月下旬で平年並であった。その後は葉、果実とも平年並の平年経過であった。

### (4) ヤノネカイガラムシ

枝での初発生は4月上旬で平年並、その後の発生経過は平年並であった。

(5) ミカンハダニ

6月中旬～7月中旬にかけての発生量が多く果実被害が懸念されたが、以降は平年並の発生量となった。

(6) アブラムシ類

初発生は4月下旬で平年並、春期の発生量は多かったが、以降漸減し、秋期の発生量は少なかった。

(7) ミカンハモグリガ

初発生は6月中旬で平年並、以降、平年並の発生経過であった。

(8) ミカンサビダニ

被害果の初発生は7月中旬でやや早く、前年同様多発生が懸念されたが、その後は平年並の発生量で推移した。

(9) クワゴマダラヒトリ

早春から広範囲に寄生を認め、その後も発生圃場率は高く経過した。

#### 4. モモ

(1) せん孔細菌病

葉での初発生は4月下旬で平年並であった。その後、広範囲に発生を認めたが、発病葉率はほぼ平年並であった。

(2) 灰星病

果実では7月中旬以降発生を認めたが、発生量は平年並であった。

(3) ナシヒメシンクイ

心折れの初発生は5月中旬で平年並、その後の心折れの発生量は平年並で推移した。

(4) モモハモグリガ

初発生は4月下旬で平年並であった。初期の発生量はやや少なかったが、7月以降被害葉率が上昇し、平年並の発生量となった。

#### 5. ブドウ

(1) 晩腐病

露地栽培での発生量は平年並、以降、やや多い発生量で経過した。施設栽培でも一部の圃場で発生を認めた。

(2) ベと病

露地栽培での初発生は6月中旬で平年並、その後の発生量はやや少なかった。施設栽培での初発生は5月中旬で平年並であったが、以降の発生量は少なかった。

(3) うどんこ病

施設栽培での初発生は8月下旬と早く、その後もやや多い発生量で推移した。露地栽培では発生を認めなかった。

(4) 灰色かび病

初発生は露地栽培、施設栽培とも平年並であった。発生量は露地栽培で平年並、施設栽培ではやや多かった。

(5) ハダニ類

露地栽培での初発生は7月中旬とやや遅かったが、夏期の小雨により発生が助長され、8月以降やや多い発生量となった。

(6) フタテンヒメヨコバイ

露地栽培での初発生は4月下旬でやや早かった。その後6月中旬までの発生量はやや多かったが、7月に入って平年並の発生量となった。

#### 6. カキ

(1) 炭そ病

果実での初発生は8月中旬でやや早く、発生量は平年並であった。

(2) うどんこ病

初発生は5月中旬で平年並、その後の発生量も平年並で推移した。

(3) カキノヘタムシカ#

被害果は、ほぼ平年並の7月中旬頃から見られるはじめた。その後、広範囲に被害果の発生を認めた。

#### 7. 果樹共通

(1) カメムシ類

予察灯で初誘殺は4月上旬と早かった。その後、7月上旬までは多発生を持続したが、8月以降減少した。

(2) ハマキムシ類

フェロモントラップでの第1世代成虫の誘殺時期はやや早く、誘殺量はやや少なかった。

## 8. キュウリ

### (1) べと病

春キュウリでの初発生は5月下旬で平年並、生育期の発生量はやや多かったが、収穫期に入って平年並の発生量となった。

夏キュウリでの初発生は6月下旬で平年並、生育期の発生量はやや多かったが、収穫期に入っての発生量はやや少なかった。

秋キュウリでの初発生は9月下旬と遅く、生育期、収穫期を通してやや少ない発生量で経過した。

### (2) 炭そ病

春キュウリでの初発生は5月下旬でやや早く、以降、やや多い発生量で経過した。

夏キュウリでの初発生は6月下旬で平年並、生育期の発生量は平年並であったが、収穫期に入ってやや多い発生量となった。

秋キュウリでの初発生は8月下旬で平年並、生育期、収穫期を通してやや少ない発生量で経過した。

### (3) うどんこ病

春キュウリでは定植直後から発生を認め、やや早い初発生であった。生育期の発生量はやや少なかったが、収穫期に入って平年並の発生量となった。

夏キュウリでの初発生は6月下旬と早かった。生育期から広範囲に発生を認め、収穫期に入って発病程度も上昇した。

秋キュウリでの初発生は8月下旬で平年並、生育期の発生量はやや少なかったが、収穫期に入って急増しやや多い発生量となった。

### (4) 褐斑病

夏キュウリでの初発生は7月下旬で平年並であった。以降、少発生で推移した。

秋キュウリでの初発生は9月下旬と遅く、以降の発生量はやや少なく経過した。

### (5) 斑点細菌病

夏キュウリでの初発生は7月下旬で遅かったが、発生量はやや多かった。

秋キュウリでの初発生は9月下旬と遅く、以降の発生量は平年並で経過した。

### (6) モザイク病

春キュウリでは5月下旬から発生を認め、平年並の初発生であった。生育期の発生量はやや少なかったが、収穫期に入って平年並の発生量となっ

た。

夏キュウリでは7月下旬から発生を認め、平年並の初発生であった。収穫期に入ってから発生量はやや多かった。

秋キュウリでの初発生は8月下旬で平年並、生育期の発生量はやや少なかったが、収穫期に入って平年並の発生量となった。

### (7) アブラムシ類

春キュウリでは4月下旬から寄生を認め、やや早い初発生であった。生育期の発生量はやや少なかったが、収穫期に入って急増し、やや多い発生量となった。

夏キュウリでの初発生は6月下旬で平年並、生育期、収穫期を通してやや多い発生量で経過した。

秋キュウリでの初発生は8月下旬で平年並、生育期の発生量はやや多かったが、収穫期に入って急激に減少しやや少ない発生量となった。

## 9. タマネギ

### (1) 白色疫病

2月下旬から発生を認め平年並の初発生であった。その後、発生圃場率は平年並で経過したが、発病株率は低かった。

### (2) べと病

初発生は3月下旬と遅かった。初期の発生圃場率は平年並、発病株率は高かった。4月下旬以降、発生圃場率も上昇しやや多い発生量となった。

### (3) ネギアザミウマ

初発生は2月中旬で平年並であった。初期から発生圃場率、寄生密度ともやや高く、4月下旬以降、発生圃場率、寄生密度とも上昇し多発生となった。

## 10. レタス

### (1) 灰色かび病

春レタスでの初発生は3月下旬で平年並であった。以降、収穫期まで発生圃場率、発病株率ともやや低く経過した。

### (2) 菌核病

春レタスでの初発生は3月下旬で平年並であった。栽培期間を通して発生圃場率、発病株率ともやや高く推移した。

### (3) モザイク病

春レタスでの初発生は4月上旬で平年並であっ

た。その後、発生圃場率は高く、発病株率は平年並で経過した。

(4) アブラムシ類

春レタスでの初発生は3月下旬、初期から発生

圃場率、寄生密度ともやや高く多発傾向にあった。結球期に入って発生圃場率、寄生密度とも上昇し多発生となった。

平成14年度 主要病害虫発生状況（香川県）

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
<b>早期水稲 (6,751)</b>			<b>ムギ類 (2,345)</b>		
葉いもち	1,264	やや少	うどんこ病	780	やや多
紋枯病	4,624	並	赤かび病	844	やや多
ばか苗病	423	並	大麦縞萎縮病	0	少
心枯線虫病	0	少	斑葉病	393	やや多
もみ枯細菌病	423	並	黒節病	0	少
ごま葉枯病	423	並	アブラムシ類	1,628	やや多
縞葉枯病	2,084	並	<b>ダイズ (550)</b>		
稲こうじ病	0	少	ハスモンヨトウ(葉)	458	多
ニカメイガ(I)	0	少	吸実性カメムシ類	46	やや少
ニカメイガ(II)	0	少	<b>カンキツ (1,926)</b>		
セジロウンカ	1,853	並	そうか病	193	並
トビイロウンカ	0	少	黒点病	1,412	並
ヒメトビウンカ	6,304	やや多	かいよう病	64	並
ツマグロヨコバイ	5,464	やや多	灰色かび病	578	並
イネゾウムシ	2,104	並	ヤノネカイガラムシ	129	並
斑点米カメムシ類	4,201	多	ミカンハダニ	1,670	やや多
イチモンジセセリ	423	やや少	ミカンサビダニ	129	並
コブノメイガ	423	やや少	カメムシ類	64	多
イネミズゾウムシ	5,041	やや少	チャノキイロアザミウマ	129	やや少
<b>普通期水稲 (9,096)</b>			ナシマルカイガラムシ	0	やや少
葉いもち	3,902	やや少	ロウムシ類	64	並
紋枯病	6,129	やや多	クワゴマダラヒトリ	129	並
ばか苗病	1,114	並	ミカンハモグリガ	1,498	並
心枯線虫病	1,675	やや多	アブラムシ類	1,219	やや少
もみ枯細菌病	561	並	<b>モモ (324)</b>		
ごま葉枯病	561	少	黒星病	0	並
縞葉枯病	1,675	やや少	せん孔細菌病	324	やや多
稲こうじ病	0	少	灰星病	54	並
ニカメイガ(I)	0	少	炭そ病	0	並
ニカメイガ(II)	0	少	縮葉病	90	並
セジロウンカ	5,568	少	褐さび病	324	やや多
トビイロウンカ	0	少	ナシヒメシンクイ	216	並
ヒメトビウンカ	8,357	やや少	モモシンクイガ	0	並
ツマグロヨコバイ	7,795	並	モモノゴマダラノメイガ	0	並
イネゾウムシ	1,114	やや少	コスカシバ	388	並
斑点米カメムシ類	6,236	多	モモハグリガ	72	並
イチモンジセセリ	5,016	並	ハダニ類	216	並
コブノメイガ	4,455	並	カメムシ類	116	多
イネミズゾウムシ	6,129	やや多	アブラムシ類	0	やや少
			カイガラムシ類	0	並

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
<b>ブドウ (282)</b>			<b>褐斑病</b>	0	少
晩腐病	75	やや多	斑点細菌病	0	少
さび病	38	並	モザイク病	41	並
うどんこ病	94	やや多	アブラムシ類	36	並
褐斑病	47	並	ミナミキイロアザミウマ	10	並
黒とう病	0	やや少	<b>夏秋キュウリ (196)</b>		
べと病	207	やや少	べと病	119	やや少
灰色かび病	66	やや多	炭そ病	111	やや少
ブドウスカシバ	0	並	うどんこ病	119	やや多
ブドウトラカミキリ	0	並	褐斑病	43	やや少
フタテンヒメヨコバイ	188	並	斑点細菌病	51	並
チャノキイロアザミウマ	0	並	モザイク病	128	並
ハダニ類	38	やや多	アブラムシ病	102	やや多
ハマキムシ類	0	やや少	ミナミキイロアザミウマ	17	やや多
カイガラムシ類	0	並	<b>タマネギ (423)</b>		
<b>カキ (274)</b>			白色疫病	106	やや少
炭そ病	30	並	べと病	53	やや多
うどんこ病	274	並	ボトリチス属菌による葉枯れ	71	やや少
落葉病	46	並	ネギアザミウマ	406	多
カキノヘタムシガ	107	やや多	<b>春レタス (280)</b>		
カイガラムシ類	91	並	灰色かび病	76	やや少
カメムシ類	274	多	菌核病	140	やや多
ハマキムシ類	0	やや少	萎黄病	0	並
チャノキイロアザミウマ	15	並	モザイク病	153	やや多
カキクダアザミウマ	0	やや少	アブラムシ類	280	多
<b>冬春キュウリ (62)</b>			ケキリムシ類	22	並
べと病	41	並	ヨトウガ	0	少
炭そ病	31	やや多	ハスモントウ	0	並
うどんこ病	52	並			



# 愛 媛 県

(農林水産部農業経営課 森貞 雅博)

## 1. 水 稲

### (1) いもち病

苗いもちは、自家育苗を中心に一部で発生し、  
平年並の発生であった。

葉いもちは、6月下旬の気温の低下と降雨が重なったことから、一部の地域で発生が多かったが、  
応急防除の実施と梅雨明け後の気象が高温少雨で経過し感染に抑制的であったため、平年並の発生であった。

穂いもちは、葉いもちの発生が平年並であったが、  
出穂後の気象が高温少雨であったため、穂への感染が少なく、やや少発生であった。

### (2) 紋枯病

高温で推移したため、早期栽培では6月下旬、  
普通期栽培では7月下旬以降、発生がみられたが、  
少雨の影響もあり、全般的に上位進展は緩慢で、  
発生程度は低く、やや少発生であった。

### (3) セジロウシ

飛来時期は平年並で、飛来量はやや少であった。  
本田の発生は、一部で高密度圃場があったが、  
全般的には発生密度は低く、やや少発生であった。

### (4) トビイロウシ

飛来時期はやや遅く、飛来量は少なかった。  
本田では、箱施用剤の普及により初期増殖を抑制でき、  
発生密度は低かった。

### (5) ヒメトビウシ

7月以降、広範囲に発生がみられた。平年並の  
発生であったが、発生密度は低かった。

### (6) ツマグロヨコバイ

7月以降、広範囲に発生がみられたが、やや少  
発生であった。

### (7) イネミズゾウムシ

本田への侵入時期は、4月の気温がやや高かった  
ことからやや早かったが、発生はやや少であった。

### (8) コブノメイガ

7月中旬より被害葉がみられはじめ、飛来時期  
は平年並、飛来量は少であった。箱施用剤処理と  
本田防除の実施により、8月中旬以降の被害葉の

増加はみられず、少発生であった。

### (9) 斑点米カメムシ類

6月より畦畔雑草地でみられ、発生時期はやや  
早かった。その後、本田でもみられるようになり、  
多発生であった。主要発生種は、クモヘリカメムシ、  
ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ、トゲ  
シラホシカメムシであった。アカスジカスミカメ  
は南予地域を中心に発生していたが、東・中予地  
域の水田畦畔での捕殺頻度が高まった。昨年の多  
発生により越冬密度は高かったと推察され、また、  
発生源となる雑草地が地域に点在しており、これ  
らが多発の助長要因として考えられる。水田畦畔  
の除草はかなり徹底されてきているが、休耕田等  
の除草の実施率は低い。7月12日(早期、早植  
え)と9月4日(普通期)に注意報を発表した。

## 2. ムギ類

### (1) 赤かび病

子のう孢子飛散量は並～やや多であり、開花期  
～乳熟期の降雨が発病に助長的であったことから、  
やや多の発生であった。

### (2) うどんこ病

3月の降雨の影響で、下位葉を中心に発生した  
が、平年並の発生であった。

### (3) 黒穂病類

種子消毒未実施田では、発生程度は低い  
が広範囲に発生がみられ、平年並の発生であった。

## 3. 大 豆

### (1) 紫斑病

8月中～下旬の開花期以降、高温少雨で経過し、  
発病に抑制的であったため、少発生であった。

### (2) ハスモンヨトウ

7月以降、高温少雨で推移し、増殖に好適で  
あったため、発生時期は例年よりも早く、8月上  
旬より白化葉がみられたが、急激な密度増加はな  
く、9月中旬以降減少し、平年並の発生であった。

#### 4. 果 樹

##### 1) カンキツ

###### (1) そうか病

4月上・中旬(発芽～展葉期)の降水量が少なく推移したため、発病には抑制的であった。近年、発生が少なく経過したことにより、薬剤の散布が減少傾向にあったことから、南予地域を中心に発生の拡大がみられた。

###### (2) 黒点病

7月以降の高温少雨により、発病は抑制された。果実発病は、7月下旬よりみられたが、以降、急激な増加はなく、枯れ枝の多い園を中心に緩やかに増加した程度であり、発病程度は低かった。

###### (3) かいよう病

越冬病斑量は、全体的にやや少であった。春葉での発病は軽微で、夏秋梢・果実の発病は少なかった。

###### (4) ヤノネカイガラムシ

4月上・中旬の気温が高く推移したため、幼虫発生時期は平年並～やや早かったが、平年並の発生であった。

###### (5) ミカンハダニ

梅雨明けまでは少発傾向で推移したが、梅雨明け以降発生が増加した。発生は、園地間差が大きかった。

###### (6) ミカンサビダニ

7月以降の高温乾燥により発生が助長され、この時期の発生密度はやや高まったが、平年並の発生であった。

###### (10) カメムシ類

越冬量は極めて多く、越冬成虫の発生は多かった。新世代成虫は減少し、飛来は、山間部の園地の一部でみられたものの、被害は少であった。新世代成虫数の減少要因として、越冬世代の主な餌であるヒノキ球果が少なかったことがあげられる。

##### 2) カ キ

###### (1) 炭そ病

7月以降の高温少雨により、発病は抑制されたが、罹病性品種(横野)の増加等により、やや少発生であった。

###### (2) うどんこ病

新葉の発病が5月下旬よりみられたが、病勢の進展は緩慢であった。

###### (3) カキノヘタムシガ

4月上・中旬の気温が高く推移したため、第1世代の発生時期はやや早かった。第2世代の発生時期は平年並であった。

###### (5) フジコナカイガラムシ

4月上・中旬の気温が高く推移したため、発生時期はやや早かった。越冬成虫が多かったことや、越冬幼虫の新梢への移動直後の防除が遅れ気味であったこと、また、7月以降の高温少雨により、発生はやや多であった。

###### (6) カメムシ類

越冬量は極めて多く、越冬成虫の発生が多かったことから、山間部の園地を中心に被害が拡大した。

#### 5. 野 菜

##### 1) 夏秋トマト

###### (1) 葉かび病

一部の主要産地で抵抗性品種を導入したことや、防除が徹底されたことから、初期の発生が少なくなり、やや少発生であった。

###### (2) かいよう病

中予地域で発生した。昨年度から発生圃場が増加していたが、本年度はさらに被害が拡大した。発生要因として、つり下げ資材による病原細菌の感染が懸念された。夏期高温時にも病勢が低下せず、多発傾向が続いた。発病株の抜き取りを徹底した。

###### (3) タバコガ類

7～8月以降に発生した。夏期の高温少雨傾向で発生が助長された。果実・茎への食入が目立ち、薬剤防除効果が上がりにくい。ネット被覆の飛び込み防止効果が高く、ヨウムシ、ハスモンヨトウの被害回避にも有効とみられた。

###### (4) マメハモグリバエ

6月より発生し、8月以降に急増した。夏期の高温少雨傾向で発生が助長された。防除対応が遅れる圃場がみられた。

##### 2) 冬春なす

###### (1) すすかび病

一部の産地で、トリフルミゾール剤に耐性を示す菌株が多数検出され、発病後の防除効果が低いこととあわせ、被害が拡大した。

###### 3) 冬春きゅうり

###### (1) うどんこ病

生育後半に多発する圃場がみられた。防除対応が遅れる圃場がみられた。

#### (2) 黄化えそ病

東・南予地域で発生した。感染株の早期除去で発生を抑制したが、生育後半に多発する圃場がみられた。発病株の抜き取りと媒介昆虫のミナミキイロアザミウマの防除で対応した。

#### 4) 夏秋きゅうり

##### (1) モザイク病

媒介昆虫のアブラムシ類有翅虫の多発生や、生育後半にかけての樹勢低下による病勢進展がみられた。発病初期には、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス(ZYMV)の関与が大きいとみられる。アブラムシ類の防除は行われているが、発病株の抜き取りはほとんど行われていない。

##### (2) 黄化病

南予地域の1市2町で発生した。6月中旬定植の作型で、7月以降発生した。発生地区では、媒介昆虫のオンシツコナジラミが多発していた。

##### (3) 黄化えそ病

生育初期から発生し、8～9月以降に増加した。全体的には防除が徹底され、発生地区は限られているが、多発傾向が続く圃場がみられた。媒介昆虫のミナミキイロアザミウマの防除は徹底されていた。

##### (4) アブラムシ類

定植直後から発生した。一部の圃場では密度の増加がみられたが、平年並の発生にとどまった。

##### (5) マメハモグリバエ

7～8月から発生し、8月の高温少雨で発生が助長され、密度が一時的に高まった。

#### 5) 春キャベツ

##### (1) 菌核病

1～3月より発生し、多発圃場がみられた。暖

冬傾向で発病が助長されている。トンネル被覆後には、防除対応が遅れる圃場が多い。

##### (2) 根こぶ病

中予地域で多発した。他のアブラナ科野菜でも発生がみられ、汚染地区が拡大している。水田跡に作付されるため、薬剤土壌混和处理の防除効果が上がりにくい。

##### (3) コナガ

作期を通して発生したが、低密度で推移した。

#### 6) たまねぎ

##### (1) べと病

収穫末期にかけて急増した。春先の高温で生育が進み肥切れとなったことや、5月の多雨で発病が助長された。防除対応が遅れた。

##### (2) ネギアザミウマ

多発圃場は一部にとどまった。薬剤防除の不徹底が発生要因となっている。

#### 7) 冬春いちご

##### (1) 炭そ病

育苗中の高温による乾燥防止のため、多灌水が行われたことが発生の助長要因となっている。発病株の抜き取りと苗の補植で対応した。

##### (2) ハスモンヨトウ

定植直後より12月まで、多発傾向が続いた。展開直後の新葉を加害され、被害が大きい。防除意識は高まっているが、発生を抑制できていない。

#### 8) そらまめ

##### (1) モザイク病

ここ数年多発傾向が続いていたが、本年はやや少発生であった。インゲンマメ黄斑モザイクウイルス(BYMV)が発病主体とみられ、整枝等の栽培管理の不十分な圃場で発生していた。種子伝染が初期の発生源とみられ、年内に発病株を放置することがその後の発病を増加させている。

平成14年度 主要病害虫発生状況（愛媛県）

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
水稻 (17,110)			フジコナカイガラムシ	159	やや多
苗いもち	8	並	カメムシ類	392	多
葉いもち	3,274	並	夏秋トマト (176)		
穂いもち	1,205	やや少	葉かび病	22	やや少
紋枯病	5,892	やや少	かいよう病	1	多
セジロウンカ	11,100	やや少	タバコガ類	14	やや多
トビイロウンカ	776	少	マメハモグリバエ	11	やや多
ヒメトビウンカ	6,930	並	冬春ナス (26)		
ツマグロヨコバイ	10,480	やや少	すすかび病	1	多
イネミズゾウムシ	4,540	やや少	冬春キュウリ(90)		
コブノメイガ	4,584	少	うどんこ病	40	やや多
斑点米カメムシ類	4,243	多	黄化えそ病	2	—
ムギ類 (1,887)			夏秋キュウリ (247)		
赤かび病	403	やや多	モザイク病	117	多
うどんこ病	71	並	黄化病	2	—
黒穂病類	541	並	黄化えそ病	9	—
大豆 (379)			アブラムシ類	141	並
紫斑病	5	少	マメハモグリバエ	6	やや多
ハスモンヨトウ	280	並	春キャベツ (215)		
カンキツ (19,389)			菌核病	8	やや多
そうか病	854	やや多	根こぶ病	1	多
黒点病	6,850	やや少	コナガ	33	少
かいよう病	2,825	並	タマネギ (405)		
ヤノネカイガラムシ	1,740	並	べと病	43	多
ミカンハダニ	15,580	並	ネギアザミウマ	292	並
ミカンサビダニ	173	並	冬春イチゴ (145)		
カメムシ類	1,366	多	炭そ病	10	やや多
カキ (955)			ハスモンヨトウ	40	やや多
炭そ病	20	やや少	ソラマメ (137)		
うどんこ病	611	やや多	モザイク病	49	やや少
カキノヘタムシガ	195	並			

# 高 知 県

(農林水産部農業技術課 松本 宏司)

## 1. 水 稻

### (1) いもち病

早期、跡地稲では、全般的に少発生であり、普通期では、平年並みの発生であった。早期苗では、葉いもちの発生が、6月上旬から一部常発地で見られた。その後梅雨入りとともに発生は漸増傾向となったが、全般的に少発生であった。穂いもちも全般的にやや多めの発生であった。普通期稲では、葉いもちの発生が、6月中旬よりみられはじめ、8月に入ってから発生面積の急激な増加はみられず、平年並みの発生となった。中山間地の一部のほ場ではやや発病程度の高いほ場もみられた。また、穂いもちも中山間地の一部のほ場で発生が多くみられた。跡作稲では、8月より発生がみられ始めたが、天候が安定していたこともあり、葉いもち、穂いもちとも少発生であった。いもち病の発生については、長期持続型箱施用剤の普及により、全般的に梅雨後期頃まで抑制されているようだ。

### (2) 白葉枯病

普通期稲で県中西部の一部に発生がみられた程度であり、全般的には少発生であった。

### (3) 紋枯病

早期稲では、平年並の6月中旬より発生がみられはじめ、8月に入り気温が高めで推移し、発生が増加したが、全般的にはほぼ平年並みの発生であった。普通期稲では、初発時期は7月中旬で、8月に入り気温が高めに推移したが、全般的に少発生であった。

### (4) 疑似紋枯病

早期稲、普通期稲とも、発生はみられなかった。

### (5) ごま葉枯病

早期稲では、全般的に少発生であった。普通期稲では、発生はやや遅く、発病後も平年並の面積で推移していたが、出穂時期より発生が増加し、収穫期には激発ほ場もみられ、全般的に多めの発生であった。

### (6) ばか苗病

早期稲、普通期稲とも、少発生であった。

### (7) 黄化萎縮病

早期稲、普通期稲とも、少発生であった。

### (8) ニカメイガ

早期稲では、県中央部、中西部で発生がみられたが、全般的に少発生であった。普通期稲では、7月に県中西部で発生がみられはじめ、多発生で推移したが、他の地域で少なかったため全般的には平年並みの発生であった。

### (9) ツマグロヨコバイと萎縮病

早期稲では、全般的に平年並みとなった。普通期稲では、6月以降、全般的に発生がみられ、県中西部で多発生となり、他の地域は発生程度の低いほ場が多く、特に問題とならなかった。

また、萎縮病の発生はみられなかった。

### (10) ヒメトビウンカと縞葉枯病

早期稲では、県西部で多発生となり、他の地域は、平年並みから少なめの発生で推移した。普通期稲では、県東部で発生が多かったが、寄生密度は低く、特に問題とならない程度であった。

また、縞葉枯病の発生はみられなかった。

### (11) セジロウンカ

早期稲では、全般的にやや少なめの発生であった。全体として寄生密度は低く、収穫前には発生面積も減少し、吸汁による被害もみられなかった。普通期稲でも平年に比べ多めの発生であったが、密度の高いほ場もみられなかった。

### (12) トビイロウンカ

早期稲では、全般的に少発生であった。普通期稲では、県東部で多発生であったが、他の地域は少発生で推移した。

### (13) コブノメイガ

早期稲、普通期稲、跡地稲とも、全般的にやや少なめの発生であった。

### (14) イネミズゾウムシ

県中央部で平年並みの発生であったが、寄生密度は低く、実害はみられなかった。他の地域では少発生で推移した。

### (15) 斑点米カメムシ類

早期稲、普通期稲、跡作稲とも、作期中の天候が良かったため、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシを中心に密度が高く

平年並みから多発生となった。

#### (16) スクミリンゴガイ

早期稲では、4月の移植直後から被害がみられ、既発生ほ場以外にも発生が拡大する傾向にあり、全般的に多めの発生となった。普通期稲では、既発生ほ場や平野部を中心に発生面積の拡大がみられ、多発生となったが、実害はさほどみられなかった。

## 2. 果 樹

### 1) カンキツ

#### (1) そうか病

温州みかんでは、全般的にやや多から平年並み、中晩柑類では、少発生となった。常発園での発生は5月よりみられ、梅雨時期に病勢が拡大し、果実での病斑もみられたが、8月以降、病勢の進展は緩慢となった。

#### (2) 黒点病

温州みかん、中晩柑類とも、平年並の発生であった。殆どの果実で病斑がみられたほ場もあったが、発病程度は低かった。

#### (3) かいよう病

温州みかんでは、昨年の発生が少なく、本年の越冬病斑が少なかったこと、台風による影響が少なかったこと、基幹防除である発芽前散布が広範囲に行われたこと等により、全般的に平年より少発生であった。中晩柑類では、県東部で強風等の影響で多発生であったが、他の地域では、やや少なめの発生であった。

#### (4) ヤノネカイガラムシ

冬期の寒風害により寄生していた葉が落葉したうえ、天敵の寄生により密度が減少したため、実害のない程度の発生であった。温州みかんの一部の園で、発生がみられた程度であった。

#### (5) ミカンハダニ

温州みかん、中晩柑類とも、越冬密度は全般的に低く、6月以降発生面積・寄生密度とも拡大し、気温も高めに推移したが、ほぼ平年並みの発生であった。

#### (6) ミカンハモグリガ

春の発生が多く、梅雨時期に一時発生が減少したものの夏秋梢の生じる7月から8月にかけて発生が増加したため、全般的に多めの発生となった。

#### (7) カメムシ類

スギ・ヒノキの穂果も少なく、ピーティング調査における捕獲数も平年並みで推移しており、ほ場へのカメムシ類の飛来量も平年並みで推移した。

## 3. 野 菜

### 1) 施設キュウリ

#### (1) うどんこ病

県中央部、中西部は調査開始期より発病が確認され、その後も平年より多発生で推移した。西部は、やや少なめの発生であった。全般的に、栽培初期を中心に発生がみられ、下位葉での発生が殆どで、上位葉への進展がみられたほ場は少なかった。

#### (2) べと病

全般的にほぼ平年並みの発生であった。

#### (3) 灰色かび病

全般的に、発病果率の高いほ場はみられず、平年並みの発生であった。

#### (4) 菌核病

県西部で多めの発生であったが、他の地域では少発生であった。

#### (5) モザイク病

ZYMV、CMV、WMV 2などの発生がみられたが、全般的に少発生であった。

#### (6) 黄化えそ病

全般的に栽培初期から発生が見られ、県中西部で多発生、県西部ではほぼ平年並みの発生であった。

#### (7) ハスモンヨトウ

栽培初期を中心に発生が見られたが、気温の低下とともに密度は減少し、年明け以降は殆どみられなくなった。

#### (8) ミナミキイロアザミウマ

栽培初期から発生がみられ、県中央部、中西部は平年並の発生、西部は調査開始期より、やや少なめの発生で推移した。

#### (9) アブラムシ類

全般的にやや少なめの発生で推移し、一部のほ場でワタアブラムシ、モモアカアブラムシの発生がみられた。

### 2) 施設ナス

#### (1) 青枯病

県東部では、10月から発生がみられたが、平年並みで推移した。県中央部も10月から発生がみら

れたが、平年より少なめで推移した。全般的には、やや少なめの発生であった。

#### (2) 灰色かび病

12月から発生がみられ、その後増加したが、一般的に平年と比べ少なめで推移した。

#### (3) すすかび病

マルハナバチの普及により、殺菌剤も含めて防除回数が減ってきたこと、効果的な防除薬剤がないことから、近年増加傾向である。県東部では、落葉がみられるほ場もあった。一般的に多めの発生で推移した。

#### (4) ハスモンヨトウ

野外での密度は平年より高かったものの、ハウスでは、防除が徹底され、平年より少なめの発生であった。

#### (5) ミナキイロアザミウマ

定植後から多くのほ場で発生がみられ、ほぼ平年並で推移したが、気温の低下とともに減少し、その後はやや少発生で推移した。3月以降は気温の上昇とともにやや漸増した。県中央部は平年よりやや多め、県東部はやや少なめ発生であり、全般的に、平年並の発生であった。

### 3) 施設ピーマン

#### (1) うどんこ病

11月から発生がみられ始めた。一般的に多発生であり、県中西部では発病程度の高いほ場もみられた。

#### (2) 斑点病

一般的に、ほぼ平年並の発生となった。

#### (3) モザイク病

県東部及び中西部で育苗期から定植初期にCMVを主体に発生が見られたが、その後の進展は緩慢であり、全般的には少発生で推移した。一部ではTMVの発生が認められた。

#### (4) 青枯病

県中央部では、定植後の気温が高めに推移したので、栽培初期から発生が見られたが、病勢の進展は緩やかであったため、平年並の発生となった。他の地域では極わずかに発生がみられた程度であった。

#### (5) ハスモンヨトウ

県東部で、定植直後の10月から多発生で推移した。他の地域は、一般的に少なめの発生であった。

#### (6) ミナキイロアザミウマ

栽培期間を通して発生が認められた。県中西部では平年に比べやや多めの発生であった。

他の地域では、ほぼ平年並の発生で推移した。全般的には、平年並の発生であった。

#### (7) ヒラズハナアザミウマ

突発的に多発生が確認されたものの、一般的には平年並みの発生であった。天敵類を利用した防除も一因として考えられる。

#### (8) アブラムシ類

モアアカアブラムシ、ワタアブラムシの発生がみられた。平年に比べ多めの発生であったが、芯止まりなど、実害のみられたほ場は殆どなかった。

### 4) 施設トマト

#### (1) 灰色かび病

県西部で多発生、中央部で平年並みの発生となった。

#### (2) 青枯病

秋期に一部のほ場で発生がみられ、春期以降は、ほぼ平年並みで推移した。全般的には、平年並みの発生であった。

#### (3) 萎ちょう病

巡回ほ場での発生はみられず、少発生であった。

#### (4) 根腐萎ちょう病

常発ほ場で発生がみられただけであり、少発生であった。

#### (5) 葉かび病

全般的に、ほぼ平年並みの発生であった。

#### (6) ハスモンヨトウ

中央部では、生育初期の10月から、寄生株率が平年よりやや高かったが、1月以降は減少した。全般的には、平年並みの発生であった。

#### (7) オンシツコナジラミ

生育初期から、一部のほ場で散見され、収穫後期の4月には寄生株率は低く、発生面積も概ね平年並みで推移した。

#### (8) シルバーリーフコナジラミ

県西部では、防除の遅れ等によりやや多めの発生、中央部は、生育初期から一部のほ場で散見された程度で、少なめの発生であった。

#### (9) マメハモグリバエ

全般的に、ほぼ平年並の発生であった。下位葉中心の発生であり、実害はみられなかった。

平成14年度 主要病害虫発生状況（高知県）

作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要	作物名・作付け面積(ha) 病害虫名	発生面積 (ha)	摘 要
水稻 (13, 630)			灰色かび病	8	並
いもち病 (葉いもち)	3, 339	少	モザイク病	1	少
〃 (穂いもち)	1, 960	並	黄化えそ病	27	やや多
白葉枯病	62	少	ハスモンヨトウ	10	並
紋枯病	1, 297	やや少	ミナミキイロアザミウマ	33	並
疑似紋枯病	0	—	施設ピーマン (シシトウを含む)	冬春169	
ごま葉枯病	2, 036	多	うどんこ病	136	多
ばか苗病	0	—	斑点病	25	並
黄化萎縮病	0	少	モザイク病	4	少
ニカメイガ	285	並	青枯病	20	並
ツマグロヨコバイ	1, 903	並	ハスモヨトウ	46	少
萎縮病	0	少	ミナミキイロアザミウマ	66	少
ヒメトビウンカ	461	並	ヒラズハナアザミウマ	112	並
縞葉枯病	0	少	アブラムシ類	19	少
セジロウンカ	2, 008	並	促成ナス (冬春 386)		
トビイロウンカ	419	並	青枯病	70	やや少
コブノメイガ	546	やや少	灰色かび病	171	やや少
イネミズゾウムシ	4, 264	少	すすかび病	161	やや多
斑点米カメムシ類	9, 024	多	ハスモヨトウ	223	やや少
スクミリンゴガイ	2, 325	多	ミナミキイロアザミウマ	161	並
カンキツ (1, 871)			促成トマト (冬春 23)		
そうか病	634	並	灰色かび病	6	並
黒点病	1, 649	並	青枯病	2	並
かいよう病	193	やや少	モザイク病	2	少
ヤノネカイガラムシ	34	少	萎ちょう病	0	少
ミカンハダニ	1, 551	並	葉かび病	4	並
ミカンハモグリガ	1, 125	やや多	根腐萎ちょう病	1	少
カメムシ類	205	並	ハスモンヨトウ	5	並
施設キュウリ(71)			オンシツコナジラミ	11	並
うどんこ病	27	多	シルバーリーフコナジラミ	2	少
べと病	34	並	マメハモグリバエ	9	並